

千葉県八千代市

内込遺跡 b 地点発掘調査報告書

— 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査 —



2003

八千代市遺跡調査会

序 文

八千代市は千葉県北西部に位置し、印旛沼と新川周辺に広がる台地上や低地の地の利を得て、農業を中心として成長してきました。他面、首都30キロ圏に位置していることから、昭和30年代以降は経済の高度成長化に伴い、首都圏の住宅都市としての性格を強めてきました。本市は、都心や近郊都市への通勤エリアとして京成電鉄線、第3セクターの東葉高速鉄道等の交通網が整備され、また大学の誘致と周辺に住宅を整備した文教都市としての事業も、成果をあげつつ更に進められています。一方、市中央部を南北に貫流する新川を中心とした河川を市民の憩いの場とする目的で、遊歩道の整備や新川千本桜植栽事業として川沿いに桜を植樹する計画も進められています。

今回の発掘調査の契機となった宅地造成事業は、市域南部の京成大和田駅に至近の位置にある八千代台北17丁目に、住宅を供給する事業が計画されたため調査を実施しました。

調査の結果、古墳時代後期を中心として平安時代前期の集落跡を発見することができました。遺物は、縄文時代中期前半の土器、古墳時代後期の竪穴住居跡からの一括資料等良好な状態で出土しました。

本書を刊行するにあたり、この報告書が八千代市の原始・古代を考古資料を通じて考えるきっかけになっていただければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまでご指導・ご協力いただいた千葉県教育庁文化財課、八千代市教育委員会、岩井富久氏、岩井稔氏をはじめ、関係諸機関の皆様に対して深く感謝いたします。また、市街地の発掘調査での苦勞を共にわかちあっていただいた調査員・調査補助員の方々、期間の限られた中での整理作業に従事いただいた整理補助員の皆様にもあわせてお礼申し上げます。

平成15年12月22日

八千代市遺跡調査会
会長 三浦幸子

凡 例

- 1 本書は、千葉県八千代市八千代台北17丁目1622番に所在する、内込遺跡b地点の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、土地所有者岩井富久氏の委託を受け、八千代市遺跡調査会が平成13.14年度に実施した。
- 3 発掘調査・本整理作業は以下のとおり実施した。

確認調査

期 間 平成13年12月7日～平成14年1月8日
面 積 236 m²/2,013m²
担 当 朝比奈竹男
備 考 平成13年度国庫費補助事業

本調査

期 間 平成14年2月1日～平成14年5月9日
面 積 1,500 m²
担 当 朝比奈竹男・森竜哉
備 考 八千代市遺跡調査会委託事業

本整理作業


期 間 平成15年9月1日～平成15年12月26日
担 当 森竜哉
備 考 八千代市遺跡調査会委託事業


- 4 本書の編集・執筆は、森竜哉が行った。
- 5 現地での遺構・遺物出土状況写真は調査員の川口貴明が、報告書掲載の遺物写真は森竜哉が撮影した。
- 6 本書の作成・刊行については、下記の整理補助員と森が協力して行い、森が統括した。
〔整理補助員〕小林孝彰 小弓場直子 立松紀代美 寺澤洋子 野中則子 日向洋子 細川麻里 山下千代子
- 7 出土遺物、実測図等の資料は、八千代市教育委員会において保管している。
- 8 本書の遺構番号は、発掘調査時のまま使用している。
- 9 遺構・遺物の縮尺は下記のとおり統一しているが、位置図、全体図等の特殊なものについては別記している。

〔遺構〕 竪穴住居跡 (D)1/80 掘立柱建物跡 (H)1/80 ビット (P)1/40

〔遺物〕 土器・石器・土製品・鉄器1/4 石鏃2/3 小型土製品1/2

- 10 遺物実測図中の土器断面のヒゲ線は、切離さないしへら削り調整の範囲を表している。
- 11 土器実測図の中軸線サイドの空きは、復元実測をしたことを示したものである。
- 12 遺構・遺物のスクリーントーンは下記のとおり統一している。

 焼土・赤色塗彩

 カマド袖・須恵器・黒色処理

- 13 本書使用の地形図は、下記のとおりである。

第2図 国土地理院発行 1/50,000「佐倉」(NI-54-19-14)

第3図 参謀本部陸軍部測量局発行 1/20,000 第一軍管区地方迅速測図(明治15年発行)

第4図 八千代市発行 1/2,500 八千代都市計画基本図

- 14 発掘調査から整理作業において下記の諸氏・機関にご指導、ご協力いただきました。記して感謝いたします。(敬称略)

岩井富久 岩井稔 田中裕 松田礼子 松本太郎 千葉県教育庁文化財課 八千代市教育委員会

本文目次

序文 凡例

第1章 序説

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第3節 遺跡の位置と環境	1

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代	6
第2節 古墳時代	8
第3節 平安時代	30
第4節 掘立柱建物跡	36
第5節 ビット・溝状遺構	38

第3章 まとめ

第1節 縄文時代	41
第2節 古墳時代	41
第3節 平安時代	41
第4節 中・近世以降	41
第5節 内込遺跡 a b 地点における遺構の変遷について	41
第6節 内込遺跡 b 地点における2期から6期の遺物について	42

挿図目次

第1図	グリッド配置図	3
第2図	周辺の遺跡分布図(市域水系図)	3
第3図	遺跡周辺の地形	4
第4図	遺跡位置図	4
第5図	内込遺跡 b 地点遺構配置図	5
第6図	内込遺跡 a . b 地点遺構配置合成図	5
第7図	2 0 2 P・2 0 5 P 遺構実測図	7
第8図	縄文時代出土遺物	7
第9図	0 8 D 遺構実測図(1) 平面図・遺物分布図・遺物出土状況図	9
第10図	0 8 D 遺構実測図(2) 炭化材出土状況図・カマド平面図	10
第11図	0 8 D 出土遺物	11
第12図	0 9 D 遺構実測図(1) 平面図・土層断面図	13
第13図	0 9 D 遺構実測図(2) 遺物分布図・カマド平面図	14
第14図	0 9 D 出土遺物(1)	15
第15図	0 9 D 出土遺物(2)	16
第16図	1 9 D 遺構実測図	17
第17図	1 9 D 出土遺物	18
第18図	2 0 D 遺構実測図	19
第19図	2 0 D 出土遺物	20
第20図	2 3 D 遺構実測図(1) 平面図・遺物分布図	22
第21図	2 3 D 遺構実測図(2) カマド平面図	23
第22図	2 3 D 出土遺物	24
第23図	2 4 D 遺構実測図(1) 平面図・遺物分布図・遺物出土状況図	25
第24図	2 4 D 遺構実測図(2) カマド平面図	26
第25図	2 4 D 出土遺物(1)	27
第26図	2 4 D 出土遺物(2)	28
第27図	2 5 D 遺構実測図 平面図・出土遺物	29
第28図	2 1 D 遺構実測図 平面図・遺物分布図・カマド平面図	31

第29図	2 1 D 出土遺物	32
第30図	2 2 D 遺構実測図 平面図・遺物分布図・カマド平面図	33
第31図	2 2 D 出土遺物 (1)	35
第32図	2 2 D 出土遺物 (2)	36
第33図	0 8 H・0 9 H 遺構実測図	37
第34図	2 0 3 P・2 0 4 P 遺構実測図	38
第35図	溝状遺構実測図	39
第36図	溝内出土遺物	40
第37図	内込遺跡 a,b 地点遺構変遷図	43
第38図	内込遺跡 b 地点2期遺物集成図	45
第39図	内込遺跡 b 地点3,4期遺物集成図	46
第40図	内込遺跡 b 地点5,6期遺物集成図	47

表 目 次

第1表	縄文時代遺物観察表	6	第13表	2 4 D 遺物観察表 (3)	26
第2表	0 8 D 遺物観察表 (1)	8	第14表	2 4 D 遺物観察表 (4)	28
第3表	0 8 D 遺物観察表 (2)	10	第15表	2 4 D 遺物観察表 (5)	29
第4表	0 9 D 遺物観察表 (1)	12	第16表	2 5 D 遺物観察表 (1)	29
第5表	0 9 D 遺物観察表 (2)	14	第17表	2 5 D 遺物観察表 (2)	30
第6表	1 9 D 遺物観察表 (1)	16	第18表	2 1 D 遺物観察表 (1)	30
第7表	1 9 D 遺物観察表 (2)	18	第19表	2 1 D 遺物観察表 (2)	31
第8表	2 0 D 遺物観察表 (1)	19	第20表	2 1 D 遺物観察表 (3)	32
第9表	2 0 D 遺物観察表 (2)	20	第21表	2 2 D 遺物観察表 (1)	34
第10表	2 3 D 遺物観察表	21	第22表	2 2 D 遺物観察表 (2)	36
第11表	2 4 D 遺物観察表 (1)	23	第23表	溝内遺物観察表	40
第12表	2 4 D 遺物観察表 (2)	24			

写真図版目次

図版 1	遺跡全景	図版 9	2 4 D
図版 2	0 8 D		2 4 D 完掘状況 カマド左補竈遺物出土状況
	0 8 D 完掘状況 壁際遺物出土状況		No.31内坏類出土状況 カマド全景
	カマド全景 遺物出土状況拡大部		カマド右補竈 No.28,29出土状況
図版 3	0 9 D	図版10	2 5 D・0 8 H・0 9 H・2 0 4 P
	0 9 D 完掘状況 遺物出土状況		2 5 D 床硬化面及び遺物出土状況
図版 4	0 9 D・1 9 D		0 8 H 完掘状況 0 9 H 完掘状況
	0 9 D カマド竈遺物出土状況 カマド全景	図版11	ピット
	1 9 D 完掘状況 遺物出土状況		2 0 2 P 完掘状況 2 0 2 P 土層堆積状況
図版 5	1 9 D・2 0 D		2 0 3 P 完掘状況 2 0 5 P 完掘状況
	1 9 D No.2 出土状況 1 9 D No.3 出土状況	図版12	縄文時代の遺物
	2 0 D 完掘状況	図版13	0 8 D 遺物 (1)
図版 6	2 1 D	図版14	0 8 D 遺物 (2)・0 9 D 遺物 (1)
	2 1 D 完掘状況 カマド全景	図版15	0 9 D 遺物 (2)・1 9 D 遺物
	カマド内 No.9 遺存状況 No.4 出土状況	図版16	2 0 D・2 1 D 遺物
図版 7	2 2 D	図版17	2 2 D 遺物
	2 2 D 完掘状況 カマド全景	図版18	2 3 D 遺物・2 4 D 遺物 (1)
	遺物出土状況	図版19	2 4 D 遺物 (2)・2 5 D 遺物
図版 8	2 3 D	図版20	溝内遺物
	2 3 D 完掘状況 カマド全景		
	遺物出土状況		

第1章 序 説

第1節 調査に至る経緯

平成13年10月、岩井稔氏から宅地造成のため当該地にかかる埋蔵文化財の有無について、八千代市教育委員会宛て照会文書が提出された。これを受け市教育委員会が現地踏査を実施した。照会地は周知の遺跡範囲内であり、照会地内でも土師器等の遺物が散布している状況であった。また、東側隣接地において平成9年に本調査を実施し、古墳時代後期の竪穴住居跡を中心に遺構が検出された。遺構は今回照会地にも及んでいることから、岩井氏に遺跡が所在する旨を回答した。

岩井氏との協議では、氏が事業を進めていきたい旨の判断があり、市教育委員会ではこれを受けて、記録保存として発掘調査を実施することとなった。確認調査は、事業計画が整い土木工事にかかる発掘の届出を待って平成13年12月7日～平成14年1月8日にかけて実施した。調査の結果、当初の想定どおり古墳時代後期と奈良・平安時代の遺構、遺物を検出することができた。

第2節 調査の方法と経過

確認調査の成果から、耕作土下がソフトロームという基本層序だったため、遺物包含層については考慮せずにソフトローム層上面を確認面とした。

調査区の設定は、公共座標系に沿って20m方眼を設定し1グリッドとした。1グリッド内を5m毎に分割して小グリッドとした。1グリッドは16に分割される。呼称方法は東西にアルファベット、南北にローマ数字とし、遺構外出土遺物や遺構位置は小グリッド名をもって扱った。(第1図参照)

調査の経過は、平成14年2月1日～5月9日の期間をもって実施した。2月1日～7日重機による表土剥ぎ、8日～13日遺構プラン確認作業、2月14日～3月15日20D,22D～24D、ピット等遺構調査、3月18日～4月4日08D,09D,19D,21D遺構調査、4月5日～26日ピット、溝状遺構、カマド調査、遺構平面実測図作成を行う。その後、遺跡全景撮影、住居・カマド掘り方等補足調査を行った。この間に遺物洗浄、注記等を実施し、最終的に5月9日をもって現場撤収を完了し現場における全作業を終了した。

第3節 遺跡の位置と環境

八千代市は千葉県の北半を占める下総台地上に位置する。台地の標高は20～50mであるが、市域では20～30mを測る。市内での標高の最高点は南西部の39.1m。最低点は北部の神崎川と新川の合流地点の1.1mである。おおまかに南西部が高く、東から北に向けて高度を減じていく台地の形状となっている。このため、河川の流れる方向も東ないし北となる傾向が見られる。台地を開析する河川は、市域中央を北流していた新川を核として、東流して新川に合流する神崎川、桑納川、高津川、北流して花見川と新川の分水嶺付近に至る勝田川、北流して印旛沼南岸に至る井野川に分類される(水系図参照)。また、台地はおおむね3枚の段丘から成り、標高25～30mの下総上位面、標高20～25mの下総下位面、標高11～15mの千葉段丘面に分けられる。5m以下は沖積地である。市内の遺跡はこの3枚の段丘上に位置し、内込遺跡は高津川南岸の千葉段丘面に占地している。

市内の遺跡について、時代毎に概観していくこととする。

旧石器時代では、萱田遺跡群が圧倒的にその調査例が多い。その内、北海道遺跡(37)でブロック63カ所、白幡前遺跡(40)でブロック56カ所と多く、他では30カ所程度である。また、新川東岸の村上遺跡群(18)でⅢ層の礫群が、その南の沖塚遺跡では環状ブロックが検出されている。吉橋の高本地区や大和田新田芝山遺跡(30)、仲ノ台遺跡(31)、高津新山遺跡(2)でブロック、遺物集中地点が検出された。概観すると新川の萱田・村上地区、桑納川南岸奥部、高津川南岸に集中が認められる。

縄文時代では、市内最南部の八千代台南に所在する大蒲遺跡で早期前半(夏島式)の竪穴住居跡が平

独で検出されている。早期後半では、北部遺跡群中(4.5)の真木野向山遺跡と瓜ヶ作遺跡で101基、上谷遺跡(12)で200基を超える炉穴が検出されている。他には下高野新山遺跡(14)で炉穴群が検出されている。前期半ば(黒浜式)では、仲ノ台遺跡(31)、ライノ作南遺跡(32)で黒浜式期の竪穴住居跡が比較的まとまって検出された。前期後半では、上高野地区南側に所在する新林遺跡(21)を主体として、上谷津台南遺跡(19)、二重堀遺跡(20)、黒沢池上遺跡(22)がある。新林遺跡では同時期の竪穴住居跡、竪穴状遺溝15基、土坑111基が検出された。北部遺跡群中(4.5)の真木野向山遺跡と瓜ヶ作遺跡で同時期の竪穴住居跡17軒が検出された。中期では前半については上谷遺跡(12)、黒沢池上遺跡(22)、西内野遺跡(29)に遺構が希薄に分布する程度だが、後半については北部遺跡群中(4.5)の真木野向山遺跡、東山久保遺跡、佐山台遺跡(5)や新林遺跡(21)、黒沢池上遺跡(22)、迫分遺跡(23)、桑納前知遺跡(25)、長兵衛野南遺跡(33)、高津新山遺跡(2)と小規模だが市域全体に広がっていく傾向が見られる。後期では佐山貝塚(3)、神野貝塚(9)といった貝塚が形成されるが、その他では大和田新田芝山遺跡(30)やライノ作南遺跡(32)北側のライノ作遺跡で単独の竪穴住居跡が検出されているのみである。晩期は佐山貝塚(3)、高津新山遺跡(2)等に遺物が出土するのみで遺構は検出されていない。

弥生時代では、中期後半において市域北側に遺跡が展開している。田原窪遺跡(4)では環濠内に竪穴住居跡41軒、逆水遺跡(10)では四隅にブリッジを持つ方形周溝墓6基、栗谷遺跡(11)では竪穴住居跡群と方形周溝墓群がセットで検出された。後期には遺跡数が増大する。萱田遺跡群では、権現後遺跡(35)、北海道遺跡(37)で竪穴住居跡が各々73軒、東部遺跡群中の栗谷遺跡(11)、上谷遺跡(12)においてもまとまりをもって検出された。その他では、逆水遺跡(10)4軒、浅間内遺跡(17)16軒、村上遺跡群(18)14軒、桑橋新田遺跡(27)3軒、新川西岸の萱田町地区に所在する川崎山遺跡、上ノ山遺跡等から竪穴住居跡が検出された。桑納川南岸の吉橋・大和田新田地区、井野川西岸の下高野・上高野地区を除いて、遺跡が展開している。

古墳時代では、弥生時代終末～古墳時代初頭にかけてはワザル山遺跡(36)で34軒、新川西岸の萱田町地区に所在する川崎山遺跡において29軒が検出された。前期では遺跡数が増加する。佐山台遺跡(5)では229軒、桑橋新田遺跡(27)では確認調査段階だが170軒を超える。その他では北部遺跡群(4.5)中の田原窪遺跡(4)で29軒、真木野向山遺跡・東山久保遺跡・瓜ヶ作遺跡・松原遺跡では20軒単位で検出された。烏田込ノ内遺跡(7)で12軒、栗谷遺跡(11)、上谷遺跡(12)、南谷遺跡(13)、浅間内遺跡(17)、作ヶ谷津遺跡(24)、高津新山遺跡(2)に検出例がある。中期では遺跡数、遺構数共に少ない。萱田遺跡群中の権現後遺跡(35)で5軒、北海道遺跡(37)で22軒、菅地ノ台遺跡(34)で6軒、新川西岸の萱田町地区に所在する川崎山遺跡において31軒、その他内込遺跡(1)、栗谷遺跡(11)、上谷遺跡(12)から数軒程度の規模で検出された。後期では内込遺跡(1)で20軒、北部遺跡群中の田原窪遺跡(4)で13軒、その他下高野新山遺跡(14)、持田遺跡(16)、菅地ノ台遺跡(34)、権現後遺跡(35)等に小規模に分布する。遺跡の時期的変遷からみると、弥生時代終末～古墳時代初頭に新川中流域に人の居住が認められ、前期中葉～後半に市域全体に遺跡数が増加し、中期では萱田地区周辺に石製模造品工房跡を主体とした集落が営まれるが規模は縮小する。後期は、中期より集落の規模は大きいが前期の比ではない。時期的には6世紀後半～7世紀代に集中している。古墳については、「内込遺跡発掘調査報告書」2001 八千代市遺跡調査会に詳細を掲載しているので参照されたい。

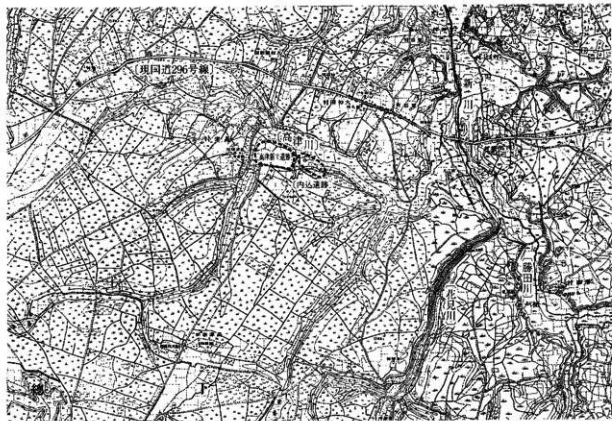
奈良・平安時代では、古墳時代前期より更に遺跡数と遺構規模の拡大が見られる。時期的には7世紀末葉～8世紀半ばまでは遺構が少なく、8世紀後半～9世紀半ばないし後半に画期的に増大し、それ以降減少していく傾向にある。遺跡では高津新山遺跡(2)、栗谷遺跡(11)、上谷遺跡(12)、村上遺跡群(18)、



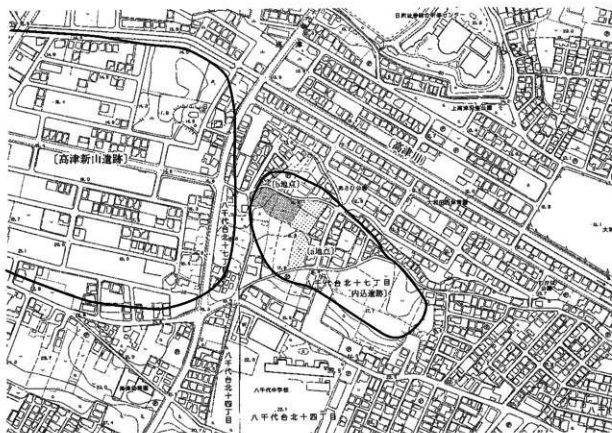
第2図 周辺の遺跡分布図 (S=1:60,000)

1. 内込遺跡 (縄文・古墳・平安)
 2. 高津南山遺跡 (縄文・古墳・奈良・平安)
 3. 雲山村集 (縄文後期)
 4. 田原窪遺跡 (弥生中期)
 5. 舟山内遺跡 (古墳前期)
 6. 平戸台古墳群 (古墳後期)
 7. 鳥田込ノ内遺跡 (古墳前期・奈良・平安)
 8. 神野志山古墳群 9. 神野貝塚 (縄文)
 10. 湫水遺跡 (弥生中・後期・中近世)
 11. 栗谷遺跡 (縄文・弥生中・後期・奈良・平安)
 12. 上谷遺跡 (縄文早期・奈良・平安)
 13. 南谷遺跡 (弥生・古墳前期)
 14. 下高野新山遺跡 (縄文・古墳)
 15. 茶本城跡 (中世)
 16. 正覚院遺跡・持田遺跡 (古墳後期・中世)
 17. 浅間内遺跡 (縄文・弥生・奈良・平安)
 18. 村上遺跡群 (旧石器・弥生・古墳・奈良・平安)
 19. 上谷津台南遺跡
 20. 草郷遺跡
 21. 新林遺跡
 22. 扇形地上遺跡 (縄文早期・中期)
 23. 透分遺跡 (縄文中期・平安)
 24. 作分谷津遺跡 (縄文・古墳・平安)
 25. 桑前前保遺跡 (縄文中期・奈良・平安)
 26. 桑前古墳群 (古墳後期)
 27. 桑原新田遺跡 (縄文中・後期・弥生・古墳前期)
 28. 吉備城跡 (中世)
 29. 吾内野遺跡 (縄文前・中期)
 30. 大和田新田芝山遺跡 (旧石器・縄文前・後期・奈良・平安)
 31. 仲ノ内遺跡 (旧石器・縄文前期・平安)
 32. ツキノ作内遺跡 (縄文前期)
 33. 長兵衛野南遺跡 (縄文中期)
 34. 菅地ノ内遺跡 (弥生・古墳中期・奈良・平安)
 35. 権成後遺跡 (旧石器・弥生・古墳・奈良・平安)
 36. ツサム山遺跡 (旧石器・弥生・古墳・奈良・平安)
 37. 北谷遺跡 (旧石器・弥生・古墳・奈良・平安)
 38. 坊山遺跡 (旧石器・縄文)
 39. 井戸遺跡
 40. 白幡前遺跡 (旧石器・弥生・古墳・奈良・平安)
- ゴシック体は半体となる時代を示す。4.5は北部遺跡群。31.32は東原遺跡群。18は村上遺跡群。35-40は芝田遺跡群をす。

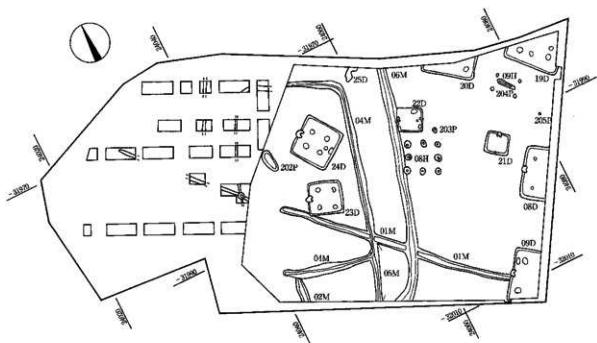




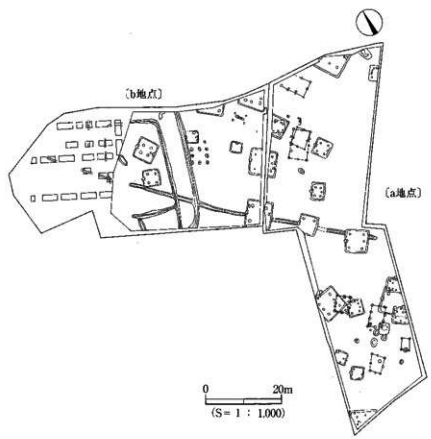
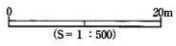
第3図 遺跡周辺の地形 (S = 1 : 40,000)



第4図 遺跡位置図 (S = 1 : 5,000)



第5图 内込道跡 b地点遺構配置図



第6图 内込道跡 a.b地点遺構配置合成図

北海道遺跡(37)、井戸向遺跡(39)、白幡前遺跡(40)等が主体となる時期の遺跡で、堅穴住居跡だけでも100軒を超えている。またこれらの遺跡からは燧燻土器類の出土が多く知られており、八千代市域の奈良・平安時代を考える上で非常に重要である。

中世では米本城跡(15)、正覚院館跡(16)、吉橋城跡(28)等の城館跡を中心として、除々に調査による成果が上がっている。正覚院館跡では2回の調査において、土器や堀の形状、遺物では康応2年(1390)銘の武蔵型木板、北宋銭(景德元寶)、陶磁器片等館跡の利用形態を伺い知る遺物が発見された。吉橋城跡では、2郭からなる部分の内部の確認調査においてピット群を確認しているが、100m程離れた2地点の確認及び本調査において堀跡、土塁、整地遺構、地下式塙等の遺構を検出した。これは、単に城跡が土塁と堀のみの一構築物ではなく、縄張り内に他の施設を併設していたと考えられる証左であろう。

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代

今回の調査では遺物を伴う遺構は検出されなかったが、形状・覆土の状態、縄文時代の出土遺物から202P(陥穴)、205P(炉穴)を当該時期の遺構と想定した。前回(a地点)の調査においても同遺構が検出されていることから、早期～中期の土地利用が伺われる。また、遺物では早期条痕文系土器、中期中葉の土器が30点程度出土している。以下、遺構・遺物について概要を述べる。

202P(第7図 写真図版11)

調査区西側のBⅢ-9.10Gに位置する。掘り込みも明確で良い状態で遺存する。ややいびつな楕円形で長軸3.22m、短軸1.49m、深さ1.55mを測る。長軸方位はN-29°-Wである。壁面は長軸で中場～底面にかけてオーバーハングし、短軸でろう斗状の断面を持つ。底面はやや凹凸が見られるが、平坦を意識している。また、5層以下は下位段丘堆積物を含んでおり、粘土化している。覆土は12層が黒色土主体の自然堆積層で、3層以下はローム、ロームブロック混じりの褐色土である。5層以下では締まりに欠ける層である。

205P(第7図 写真図版11)

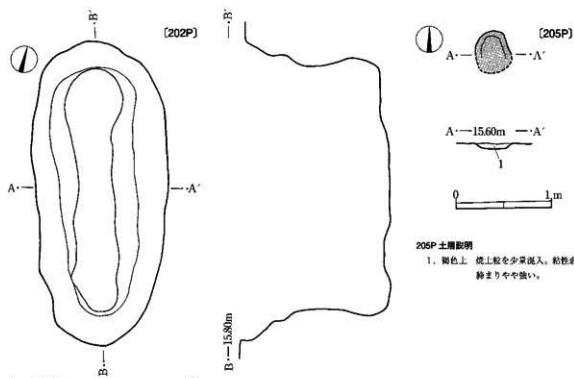
調査区東端のDⅢ-8Gに位置する。浅い掘り込みで調査時の掘り過ぎで遺存悪い。ややいびつな円形で0.38m、深さ0.07mを測る。壁面は緩やかに立ち上がる。底面は平坦で皿状の断面を持つ。覆土は焼土粒を少量含む褐色土の単一層である。

縄文時代出土遺物(第8図 写真図版12)

出土土器は破片を含めると19点あるが、11点を図示した。他に耳飾?、石鏝、磨石が出土している。1、2は早期条痕文系土器で、共に条痕は浅く明瞭ではない。3～8は中期阿玉台式である。3は隆帯下に単列角押文、4、5は波状口縁部で新しい段階に位置づけられる。6は複列角押文を口縁下に施文する。7は横位波状沈線文。9～11は阿玉台式並行の勝坂系土器である。9は横位沈線下に縦位沈線が施文される。10は隆帯に沿って竹管状工具による押し文と細沈線を施文している。11も10に類似する。

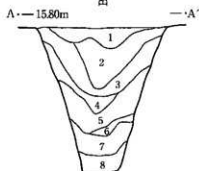
第1表 縄文時代遺物観察表

採回番号	種類	計測データ・手法上の特徴
8図12	磨石・砥石	砂岩質 全長7.4cm 幅2.7cm 重さ75.5g 断面四角形で各々の辺において磨り跡が見られる。下湯部に敲打痕あり。
13	土製耳飾?	両端欠損の上板状耳飾か。遺存長3.5cm 幅1.9cm 重さ7.0g 胎土は雲母、長石、石英、小礫粒混入。色調は淡褐色。なで整形。
14	石鏝	黒曜石 全長1.4cm 幅2.7cm 重さ1.0g 両面に稜をもつ丁寧な作り。基部に縦い抉り。基部先端・部欠



205P 土層説明

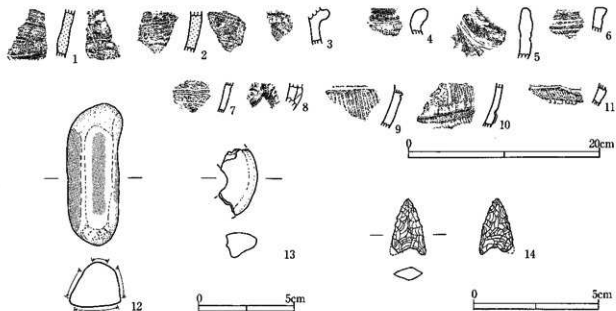
1. 褐色土 焼土粒を少量混入。粘性弱く、締まりやや強い。



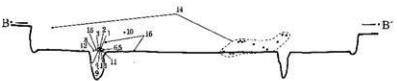
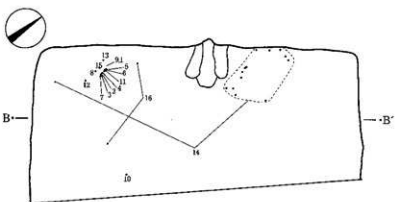
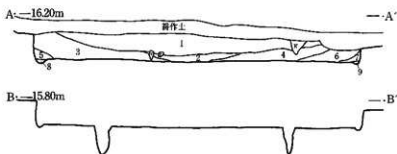
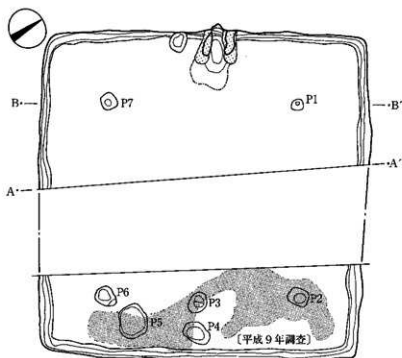
202P 土層説明

1. 茶褐色土 耕作土に近似。粘性弱く、締まりややある。
2. 黒褐色土 ローム粒少量混入。粘性弱く、締まり強い。
3. 褐色土 ローム土主に、2層と混在している。締まり強い。
4. 褐色土 色調は3層より明るい。
5. 褐色土 5~15mm 大のローム粒比較的多く含む。黒褐色土の混入は見られない。
6. 褐色土 5~50mm 大のローム多量に含む。締まり全くなく、ぼそぼそ。
7. 褐色土 5~10mm 大のロームやや多く含む。10cm 大ロームブロック少量含む。粘性ややあり、締まりなくぼそぼそ。やや、灰色がかる。
8. 褐色土 5~10mm 大のローム混入。表面は褐色粘土の成田層である。

第7図 202P・205P 遺構実測図



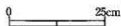
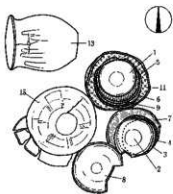
第8図 縄文時代出土遺物

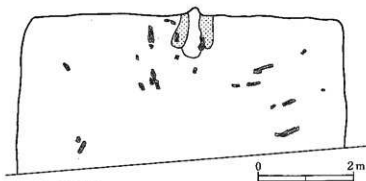


第9図 O8D 遺構実測図 (1)

O8D土層説明

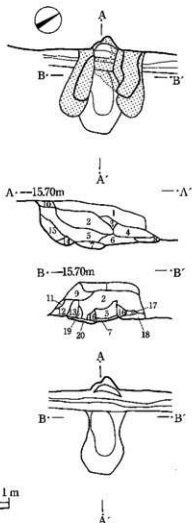
1. 黒褐色土 団点状に暗褐色土が混入。ローム粒1~2mm大多く含む。地上段層裏に含む。粘性弱く、締まり中。
2. 暗褐色土 斑点状に黒褐色土が混入。ローム粒1~2mm大多く含む。ロームブロック0.5~2cm少量含む。粘性弱く、締まり中。
3. 暗褐色土 上部に黒褐色土が混入。ローム粒1~3mm大多く含む。ロームブロック0.5~3cm多く含む。地上段層裏含む。粘性、締まり共に弱い。
4. 暗褐色土 上部に黒褐色土が混入。ローム粒1~2mm大含む。ロームブロック0.5~2cm少量含む。粘性弱く、締まり中。2~4cm大ロームブロック混入。ローム粒1~2mm大含む。炭化物微量を含む。粘性、締まり共に弱い。
5. 暗褐色土 暗褐色土。ローム粒1~2mm大含む。炭化物微量を含む。粘性、締まり共に弱い。
6. 褐色土 ローム粒1~2mm大多く含む。粘性弱く、締まり中。
7. 暗褐色土 褐色土少量混入。ローム粒1~2mm大含む。粘性弱く、締まりやや弱。
8. 褐色土 ローム土に暗褐色土が少量混入。ローム粒1~2mm大含む。粘性強く、締まり中。
9. 褐色土 ローム土に暗褐色土が少量混入。ローム粒1~2mm大含む。2cm大ロームブロック少量混入。粘性弱く、締まり中。





08Dカマド土層説明

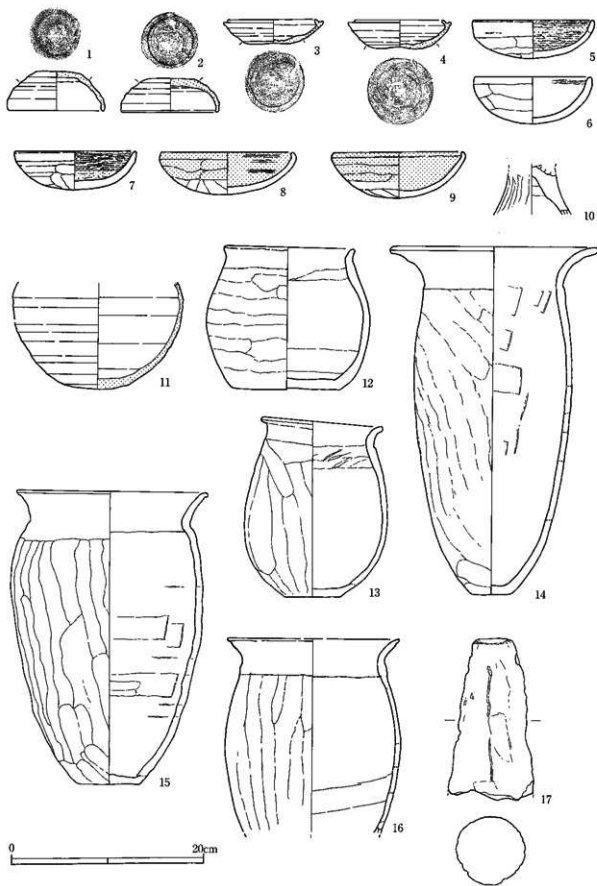
1. 暗褐色土 暗褐色上半体に淡褐色砂質粘土粒, 3mm 大ローム粒, 炭化物混入。
2. 淡褐色土 淡褐色砂質粘土。
3. 暗褐色土 黒色上, 3mm 大ローム粒中に淡褐色砂質粘土混入。
4. 黒褐色土 黒色上, 炭化物, 3mm 大焼土粒混入。
5. 暗赤褐色土 黒色上, 炭化物, 3mm 大焼土粒, 淡褐色砂質粘土混入。
6. 赤褐色土 焼上, 5mm 大焼土ブロック混入。
7. 暗褐色土 ローム, 黒色土混入層。
8. 黒褐色土 黒色土中に 3mm 大焼土粒混入。
9. 暗褐色土 1層崩れ。炭化物含まない。
10. 褐色土 ローム, 淡褐色砂質粘土, 焼土粒混入層。
11. 暗褐色土 淡褐色砂質粘土混入。
12. 暗褐色土 黒色土上に淡褐色砂質粘土混入。
13. 暗褐色土 黒色土, 淡褐色砂質粘土混入層。
14. 褐色土 ローム, ロームブロック, 黒色土少量の混入層。締まっている。階層混入。
15. 暗褐色土 5層崩れ。ロームや多い。
16. 暗褐色土 ローム, 淡褐色砂質粘土, 黒色土, 焼土粒混入層。
17. 暗褐色土 淡褐色砂質粘土, 暗褐色土混入層。
18. 淡褐色粘土 淡褐色砂質粘土, ローム上混入層。
19. 褐色土 ローム, ロームブロック, 黒色土混入層。非崩落層。
20. 暗褐色土



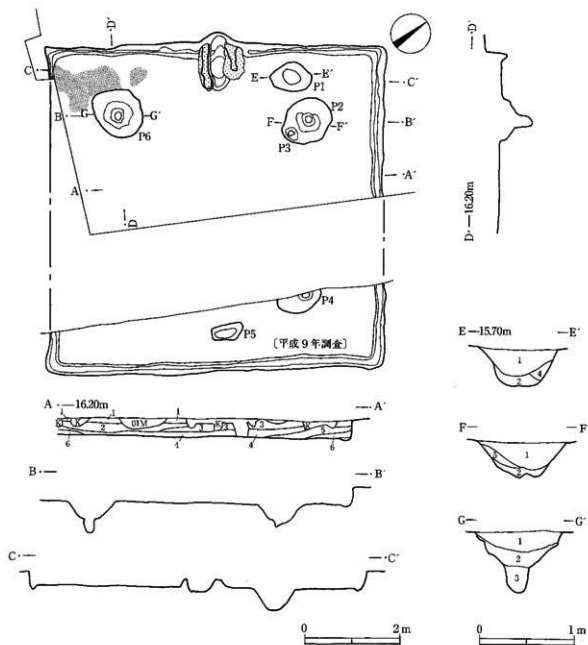
第10図 08D 遺構実測図 (2)

11	土師器 環	口徑 器高	137 45	口縁一部欠	褐色色	白色粒, 小礫	口辺部横なで 体部外-底部へラ削り後横位へラ削り内- なで整形 内面と体部外面中位まで炭素吸着による黒色 処理。
9	土師器 環	口徑 器高	137 49	ほぼ定形 口縁一部欠	褐色色	白色粒, 小礫	口辺部横なで 体部外-底部へラ削り後横位へラ削り内- なで整形 内面と体部外面中位まで炭素吸着による黒色 処理。
10	土師器 高坪	通存高	49	脚部のみ欠 溝	暗赤褐色	白色粒, 長石	脚部外-横位へラ削り 内-なで整形
11	須磨器 短頸壺	胴部径 通存高	179 113	底部一胴部 1/2遺存	淡灰色	石英, 白色粒	底部一胴部包曲部 底部回転へラ削り調整により丸底状 東海産
12	土師器 壺	口徑 器高 底径	133 150 114	ほぼ定形 胴部一部欠	暗褐色~淡赤褐色	白色粒, 長石 石英, 雲母	口辺部横なで 胴部外-横位へラ削り 内-へラなで 口辺~底部の1/2外面において二次焼成による割離なし。 い。
13	土師器 壺	口徑 器高 底径	124 191 58	定形	暗褐色~茶褐色	白色粒, 石英	口辺部横なで 胴部外-縦位へラ削り 内-へラなで 内面において二次焼成による割離, 炭化物の付着著しい。
14	土師器 壺	口徑 器高	219 369	口辺一胴下 2/3遺存	外淡褐色~暗褐色 内淡褐色	白色粒, 黒雲 母	口辺部横なで 胴部外-斜位へラ削り 内-へラなで 胴 下半部において二次焼成著しい。
15	土師器 壺	口徑 器高 底径	202 311 64	ほぼ定形 底径 64	暗褐色~茶褐色	白色粒, 石英 長石	口辺部横なで 胴部外-縦位へラ削り 内-横位へラなで
16	土師器 壺	口徑 器高	180 199	口辺一胴下 半1/3 遺存	暗黒褐色~淡橙 褐色	白色粒, 小礫 長石, 雲母	口辺部横なで 胴部外-縦位へラ削り 内-横位へラなで 内面で二次焼成の割離著しい。
17	土師器 支脚	通存高 上部幅	171 42	基底部欠	褐色色	白色粒, 長石	なで整形 重さ845.5g

第3表 08D 遺物観察表 (2)



第11图 08D 出土遗物



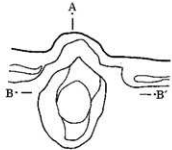
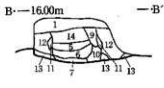
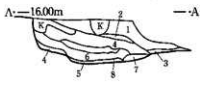
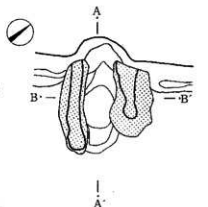
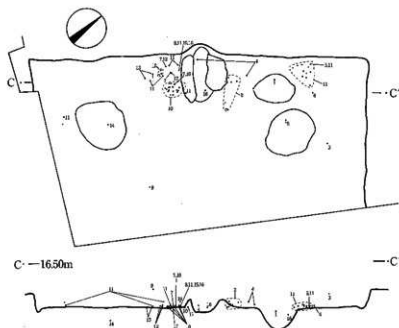
09D土層説明

1. 褐色土 雑粒のローム粒を含む。粘性、締まり共弱い。
2. 褐色土 1より明るい。微粒のローム粒を含む。粘性、締まり共弱い。
3. 明褐色土 やや粒の大きいローム粒を含む。粘性、締まり共弱い。
4. 褐色土 雑粒のローム粒を含む。1〜2cm大ロームブロック混入。粘性やや弱く締まり中。
5. 褐色土 少量のローム、黒色土混入。粒子粗い。粘性、締まり共やや弱い。
6. 褐色土 少量のローム、微量の黒色土混入。粘性、締まり共やや弱い。

09Dピット土層説明

1. 暗褐色土 1〜3mm大のローム粒を多く含む。1〜3cm大のロームブロック混入。粘性強く、締まりやや弱い。
2. 暗褐色土 1〜3mm大のローム粒を含む。1cm大のロームブロック微量混入。粘性やや弱く、締まり弱い。
3. 暗褐色土 1〜3mm大のローム粒を含む。粘性やや弱く、締まり極めて弱い。
4. 褐色土 1〜2mm大のローム粒を少量含む。粘性中、締まり弱い。
5. 暗褐色土 1〜2mm大のローム粒を少量含む。1〜2cm大のロームブロック微量混入。粘性、締まり共弱い。

第12図 09D遺構実測図(1)



09Dカマド土層説明

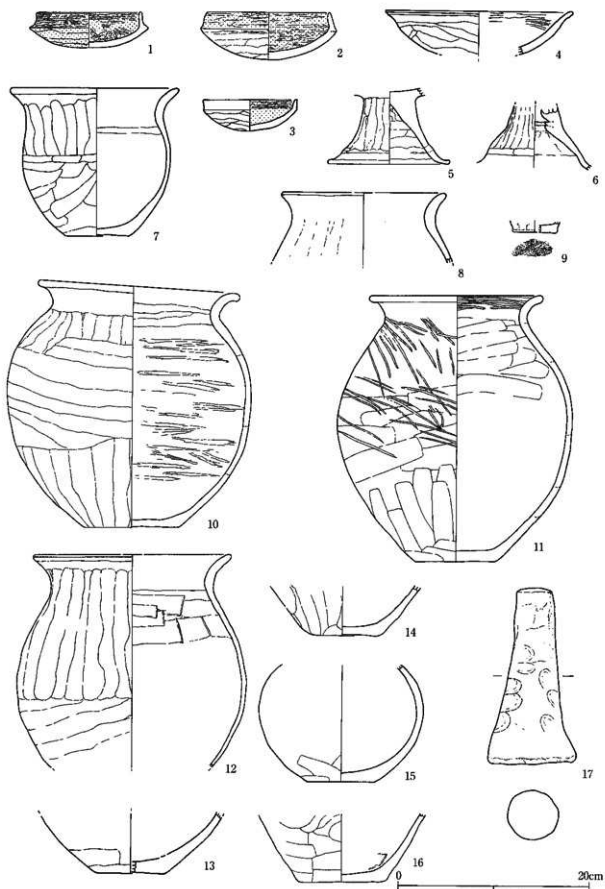
1. 暗褐色土 淡褐色砂質粘土、黒色土混入層、焼土粒少量混入。
2. 淡褐色土 淡褐色砂質粘土上に黒色土、焼土粒少量混入。
3. 暗褐色土 ローム、黒色土混入層。纏まっている。
4. 暗褐色土 黒色土、淡褐色砂質粘土、赤色化砂混入層。
5. 赤褐色土 黒色土、赤色化砂混入層。
6. 暗赤褐色土 ローム、焼土ブロック、黒色土混入層。
7. 黒褐色土 2~3mm大の焼土ブロック、ロームブロック混入。
8. 赤褐色土 ローム、焼土ブロック混入層。
9. 赤褐色土 淡褐色砂質粘土上、ローム、赤色化砂、黒色土混入層。
10. 赤褐色土 ローム、焼土ブロック、赤色化砂混入層。
11. 赤褐色土 赤色化砂
12. 淡褐色砂質粘土 粗部分。
13. 淡赤褐色粘土 粗部分構装粘土。
14. 赤褐色土 ローム、淡褐色砂質粘土、焼土粒混入層。

第13図 09D 遺構実測図 (2)

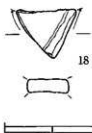


14層	土師器 壺	底径 遺存高	7.4 6.5	底部全周遺 存	淡赤褐色	白色粒、雲母	胴部外-下端縁位へタ削り なで整形 内-な で整形 二次焼成による両面割離著しい。 8と同一體
14	土師器 壺	底径 遺存高	7.0 5.1	底部全周遺 存	淡赤褐色	白色粒、雲母	胴部外-下端縁位へタ削り 二次焼成による内 面割離著しい。
15	土師器 壺	底径 遺存高	7.2 12.3	底部~側下 半全周遺存	暗褐色	石英、長石	胴部外-下端へタ削り 二次焼成による内面割 離著しい。
16	土師器 壺	底径 遺存高	8.9 7.1	底部~側下 半1/2遺存	赤褐色	雲母、長石	胴部外-下端縁位へタ削り後下位胴位へタ削り 内-へらなどで 両面割離著しい。
17	土師器 支脚	全長 上部幅 基部幅	18.6 3.8 9.3	完形	暗褐色	白色粒、長石	なで整形 重さ807.5g 指頭痕が顕著。基部部 二次焼成によりもろい。
15層	土師器 土器片	上辺 厚さ	3.2 0.6	完形	列縁黒灰色 内暗褐色	赤色粒	重さ57g 土師器壺上半部片の再利用品 二泥 において磨り跡顕著。

第5表 09D 遺物観察表 (2)



第14图 09D 出土遺物 (1)



第15図 09D出土遺物 (2)

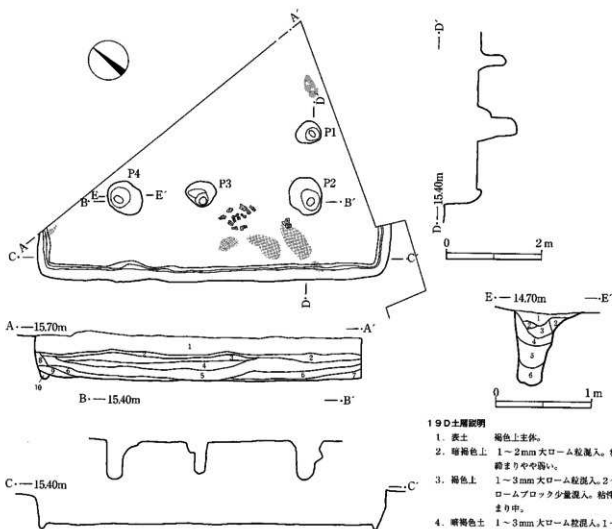
19D住居跡 (第16.17図 写真図版4.5.15)

調査区北東コーナーのDⅢ-5グリッドに位置し、主軸方位はN-42°-W、平面形は調査区外に遺構が延びているため不明だが、一辺7.1mの方形と想定され、壁高は65~73cmである。周溝は調査区内で周回しており、全周すると想定される。規模は幅13~17cm、深さ11~13cmを測る。柱穴はP1~4を検出している。柱間寸法はP1-2間で1.45m、P2-3間で2.25m、P3-4間で1.8mとばらつきが見られる。深さはP1-50cm、P2-80cm、P3-70cm、P4-85cmを測る。出入り口は南東壁側に想定される。カマドは調査区域外だが、他の遺構を考慮すると北西壁側に想定される。床面はハードローンを掘り込んで、凹凸面にローンを充填して床面としている。覆上は褐色土を主体としており、3層以下においてローンブロック混じりの土層が堆積していることから人為的な埋め戻しと考えられる。

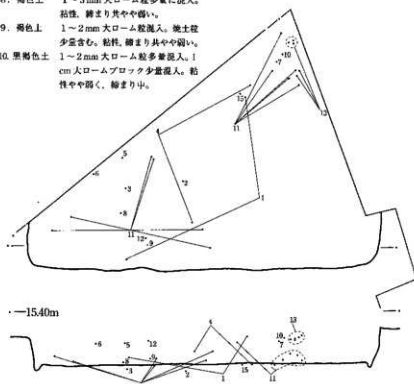
遺物は2,3がP3,4掘り方上層から出土していることから、住居廃絶時に近い時期と考えられる。その他は覆上上層からの出土例が多いが、離れた地点や出土レベルの異なる等の接合が4,11に見られることから廃絶時に近い段階の遺物と考える。その他、焼土・炭化材が壁際に近い地点から出土している。またP4内上層に焼土の堆積が見られることから、柱抜き取り後の堆積と想定される。よって、住居廃絶時の行為として部材を燃やしたことが伺われよう。

第6表 19D遺物観察表 (1)

標頭番号	器種	寸法 (cm)	遺存度	色調	胎土	手法上の特徴
17図	1 須恵器 蓋坏	口径 14.0 遺存高 2.9	口辺部1/3 受部径 11.4	淡青灰色	白色粒多含	体部外面に工具による擦痕と見られる浅い凹みがある。
2	土師器 坏	口径 13.1 器高 4.6	完整	外 橙褐色 内 濃褐色	白色粒多含 赤色粒少量	口辺部内外一横位ヘラ磨き 体部外一横位ヘラ削り 内一放射状ヘラ磨き 炭素吸着による黒色処理
3	土師器 坏	口径 11.5 器高 5.9	口辺一体部 1/2遺存	外 暗褐色 内 黒褐色	雲母、石英 長石、砂粒	口辺部内外一横間で 体部外一横位ヘラ削り 内一ヘラなどで
4	土師器 坏	口径 11.8 器高 3.1	口辺一体部 1/2遺存	暗茶黒褐色	白色粒多含 赤色粒少量	口辺部内外一横位ヘラ磨き 体部外一横位ヘラ削り 内一斜位ヘラ磨き 炭素吸着による黒色処理
5	土師器 坏	口径 17.3 遺存高 3.1	口辺一体部 1/4遺存	黒茶褐色	白色粒、長石	内外一ヘラ磨き 体部内一低位放射状ヘラ磨き 表面磨仕上げによる黒色処理
6	土師器 坏	口径 11.8 遺存高 3.3	口辺一体部 1/8遺存	外 茶褐色 内 黒茶褐色	白色粒	口辺部外一横位ヘラ磨き 体部外一斜位ヘラ削り後縁部分横位ヘラ削り 内一横位ヘラ磨き 内面炭素吸着による黒色処理
7	土師器 坏	口径 - 器高 -	口辺一体部 1/10遺存	赤褐色	白色粒、石英 長石	口辺部内外一横間で 体部外一ヘラ削り調整 赤彩は体部外面に及ぶ。口縁部内側に浅い凹みがめぐる。
8	土師器 高坏	口径 - 遺存高 5.1	胴部全周	黒茶褐色	白色粒多含 赤色粒	胴部外一縦位ヘラ削り
9	土師器 高坏	口径 - 遺存高 5.8	胴部全周	暗褐色	白色粒、雲母	胴部外一縦位ヘラ削り 内一ヘラなどで
10	須恵器 甕	口径 20.6 遺存高 4.9	口辺一体部 1/8遺存	淡青灰色~淡粉 灰色	石英、長石 白色粒	胴部外一縦位ヘラ削り 内一ヘラなどで 口辺部外縁部 炭素吸着
11	土師器 甕	口径 14.1 遺存高 10.0	口辺部全周	茶褐色	小礫、白色粒	口辺部一横間で 胴部外一斜位ヘラ削り 内一ヘラなどで 内面火熱による割離者しい。
12	土師器 甕	口径 13.9 遺存高 5.4	口辺部1/5	茶褐色	赤色粒 白色 粒	口辺部一横間で 胴部外一横位ヘラ削り 内一ヘラなどで
13	土師器 甕	口径 7.2 遺存高 12.8	胴部一底部 1/8遺存	淡橙褐色	石英多含 白 色粒	胴下部外一縦位ヘラ磨き 内面割離者しい。



8. 褐色土 1~3mm 大ローム粒多量に混入。粘性、締まり共やや弱い。
9. 褐色土 1~2mm 大ローム粒混入。焼土粒少量含む。粘性、締まり共やや弱い。
10. 栗褐色土 1~2mm 大ローム粒多量混入。1cm 大ロームブロック少量混入。粘性やや弱く、締まり中。



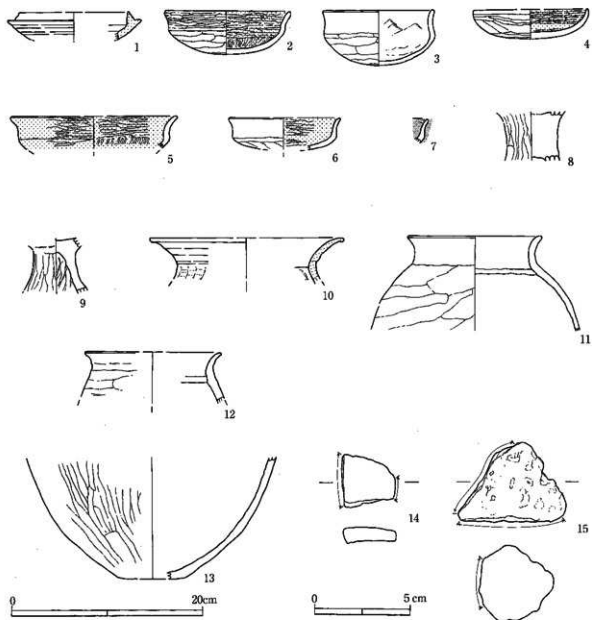
第16図 19D 遺構実測図

19D 土層説明

1. 表土 褐色土主体。
2. 暗褐色土 1~2mm 大ローム粒混入。粘性弱く、締まりやや弱い。
3. 褐色土 1~3mm 大ローム粒混入。2~3cm 大ロームブロック少量混入。粘性弱く、締まり中。
4. 暗褐色土 1~3mm 大ローム粒混入。1~3cm 大ロームブロック微量混入。粘性弱く、締まり中。
5. 暗褐色土 1~3mm 大ローム粒混入。2~4cm 大ロームブロック少量混入。粘性弱く、締まり中。
6. 黒褐色土 1~2mm 大ローム粒混入。3cm 大ロームブロック微量混入。粘性弱く、締まり中。
7. 褐色土 1~2mm 大ローム粒混入。粘性弱く、締まりやや弱い。

19D E-E' 関土層説明

1. 暗褐色土 1~2mm 大のローム粒を多く含む。1~3mm 大焼土粒混入。炭化物混粘性中。締まりやや弱い。
2. 暗赤褐色土 暗褐色土に焼土粒をまんべんなく含む。粘性、締まり共やや弱い。
3. 赤褐色土 焼土中に暗褐色土が斑点状に含まれる。炭化物含む。粘性弱く、締まり中。
4. 暗褐色土 1~2mm 大のローム粒を多量含む。炭土粒混入。粘性やや弱く、締まり中。
5. 暗褐色土 1~3mm 大のローム粒を多量含む。3~5mm 大のロームブロック混入。粘性強く、締まりかなり弱い。
6. 暗褐色土 1~3mm 大のローム粒を多量含む。3~5mm 大のロームブロック混入。粘性強く、締まり5割より弱い。



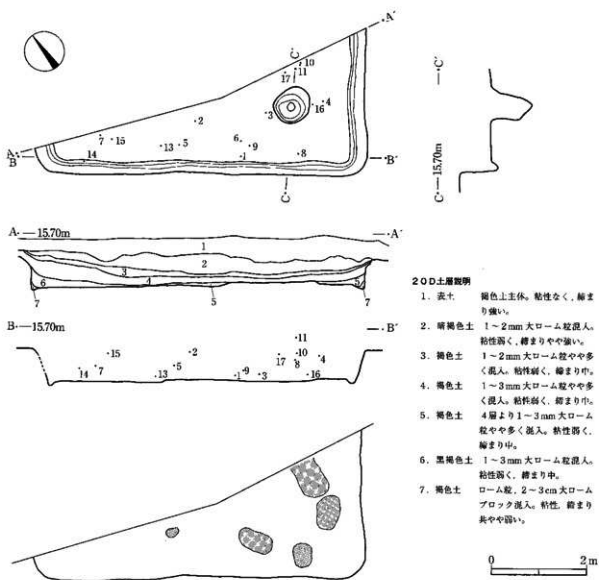
第17図 19D出土遺物

第7表 19D出土遺物(2)

17図 14	土製品 土器片	全長 幅	28 28	完形	淡褐色	白色粒	土器器身体部再利用品 二面において磨り跡顕著。 重さ7.1g
15	料石	縦長4.2 横長5.6	重さ13.0g	灰白色	二面において磨り跡顕著。		

20D住居跡(第18.19図 写真図版5.16)

調査区北東コーナーのCⅢ-13グリッドに位置し、主軸方位はN-50°-W、平面形は調査区外に遺構が延びているため不明だが、一辺6.75mの方形と想定され、壁高は60~65cmである。周溝は調査区内で周回しており、全周すると想定される。規模は幅20cm、深さ10~13cmを測る。柱穴はP1のみを検出している。深さは85cmを測る。出入口は南東壁側に想定される。カマドは調査区域外だが、他の遺構を考慮すると北西壁側に想定される。床面はハードロームを掘り込んで、凹凸面にロームを充填して床面としている。覆土は褐色土を主体としており、3層以下においてローム粒混じりの土層が堆積し



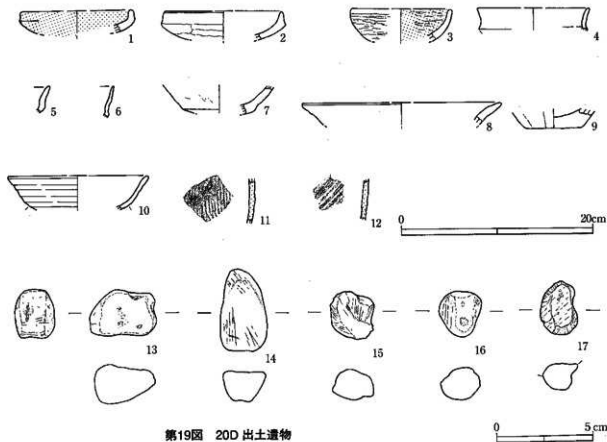
第18図 20D遺構実測図

ていることから人為的な埋め戻しと考えられる。

遺物は古墳時代中期、後期、平安時代の遺物が混在している。床面直上から出土している遺物は古墳時代後期が多い。住居の形態からも同時期に想定される。擦痕の見える軽石も出土レベルから本時期の遺物に想定される。その他、焼土がピット周辺から出土している。

第8表 20D遺物観察表(1)

探検番号	部 種	寸 法 (cm)	遺存度	色 調	結 土	手法上の特徴
19回	土師器 杯	口径 11.5 遺存高 2.3	口辺~体部 1/4遺存	淡黒灰色	雲母、砂粒	口辺部外~横なで 体部外~ヘラ刮り後なで 内~なで整形 灰素吸着による表面黒色処理
2	土師器 杯	口径 13.2 遺存高 3.0	口辺~体部 1/3遺存	淡褐色	白色粒、雲母	口辺部外~横なで 体部外~横位ヘラ刮り 内~なで整形
3	土師器 杯	口径 10.4 遺存高 3.4	口辺~体部 1/5遺存	外~赤褐色 内~黒茶褐色	白色粒、雲母	口辺部外~横なで 体部内外~横位ヘラ刮り 灰素吸着による内面黒色処理



第19図 20D 出土遺物

194	4	土師器 坏	口径 11.8 遺存高 2.3	口辺一体部 1/6遺存	淡茶褐色	白色粒、雲母	口辺部内外一横まで
	5	土師器 坏	口径 - 器高 -	口辺部	淡茶褐色	白色粒、雲母	口辺部外一横まで 体部外へラ削り 内一横位へラ磨き
	6	土師器 坏	口径 - 器高 -	口辺部	外-淡褐色 内-淡褐色	白色粒、雲母	口辺部外一横まで 体部外へラ削り 内一横位へラ磨き
	7	土師器 点坏	口径 - 遺存高 3.0	坏体部1/3遺 存	外-淡褐色 内-淡茶褐色	白色粒、雲母	内外まで整形
	8	土師器 変	口径 21.0 遺存高 2.2	口辺部1/5遺 存	淡茶褐色	白色粒、雲母 砂粒	口辺部内外一横まで
	9	土師器 変	口径 6.0 遺存高 1.8	底部1/2遺 存	外-淡茶褐色 内-橙褐色	白色粒	胴部下位外一横位へラ削り 内一横まで整形
	10	土師器 変	口径 14.8 遺存高 3.5	口辺一体部 1/5遺存	淡茶褐色	黑色粒、雲母	ロクロ使用 体部下端一回転へラ削り調整
	11	須恵器 変	-	胴部一帯	淡赤褐色	白色粒、雲母 黑色粒、砂粒	胴部外一平行引き目文
	12	須恵器 変	-	胴部一帯	淡青灰色	白色粒主体	胴部外一平行引き目文
	13	軽石	縦長2.4 横長3.5 重さ5.5g	左側面に縦位の細かな磨痕がみられる。			
	14	軽石	縦長4.3 横長2.4 重さ5.1g	上面に縦位の磨痕がみられる。			
	15	軽石	縦長2.5 横長2.1 重さ2.0g	上面に縦位の磨痕が、左側面に斜位一横位の細かな磨痕がみられる。			
	16	軽石	縦長2.4 横長2.1 重さ2.5g	左側面に縦位の磨痕がみられる。			
	17	軽石	縦長2.8 横長2.0 重さ2.5g	上面及び側面全面に斜位の磨痕がみられる。			

第9表 20D 遺物観察表 (2)

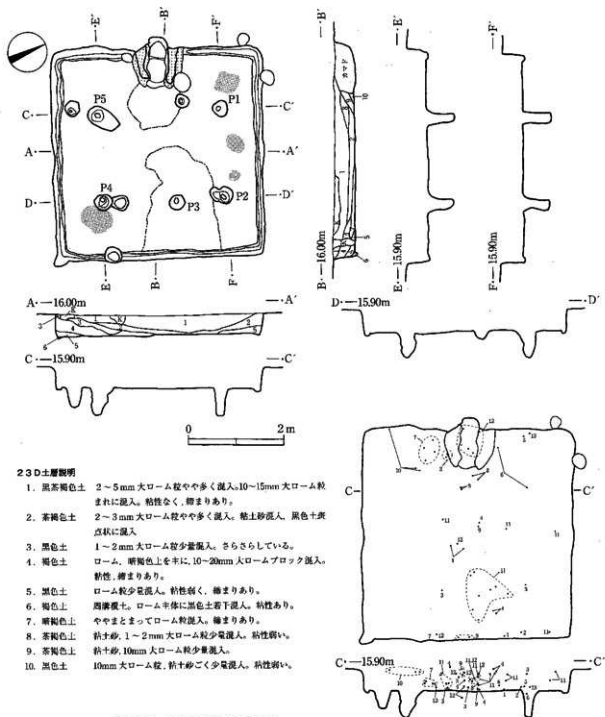
23D住居跡(第20,21,22図 写真図版8.18)

調査区中央のBⅢ-15グリッドに位置し、主軸方位はN-72°-W、平面形は4.5mのほぼ方形で、壁高は40~45cmである。周溝は全周するが、カマド両袖直下において立ち上がっている。規模は幅15cm、深さ5~8cmを測る。主柱穴は4本で、柱間寸法はP1.2、P4.5間で1.85m等間、P2.4、P1.5間で2.55m等間である。深さはP1-60cm、2-55cm、3-15cm、4-55cm、5-55cmを測る。出入り口はカマド対面のP3が該当する。カマドは西壁中央に位置し、袖部が良好な状態で遺存している。また、天井部は遺存していなかったが、覆土の状況から煙道部の範囲を長軸24cm、短軸18cmの楕円形と特定できた。火床部は袖部中程で7~8cmの焼土、焼土ブロック、ロームブロックが堆積している。煙道部は燃焼部奥で25°の角度をもって緩く立ち上がり、更に40°の角度で立ち上がっている。袖部の構築は、粘度の高い褐色粘土を芯として、淡褐色砂質粘土を積み重ねている。床面はハードロームを掘り込んで、凹凸面にロームを充填して平坦面とした地床である。硬化面は出入り口側の東壁際からP3の延長上とカマド前面に見られる。覆土は、レンズ状堆積の黒色土~暗褐色土で、自然埋没層と考えられる。4層は土堤の埋没土であろうか。

遺物は覆土中からの出土が多い。3.4.11,12は数地点に離れて、しかも出土レベルが上層から下層にわたっている特異性をもっている。1.2.6は床面直上の出土である。また、P1.2の壁際とP4に接して焼土が検出された。

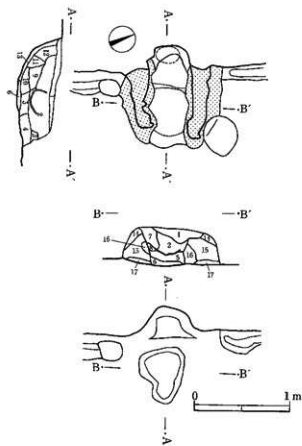
第10表 23D 遺物観察表

押器番号	器種	寸法 (cm)	遺存度	色調	胎土	手法上の特徴
22図	須恵埴 蓋坏	口径 11.3 器高 4.3	1/3遺存	外暗黄灰色(自然熱)内青灰色	ち密	天井部外-側傾へら削り調整。関東産
2	土師器 坏	口径 12.7 器高 4.3	ほぼ完形	外淡褐色 内暗褐色	白色粒、雲母	外-側位へら削り 内-内で及び側位。側位へら磨き 遺仕上げによる両面黒色処理か
3	土師器 坏	口径 13.9 遺存高 4.5	1/2遺存	淡褐色 一部黒 漆	白色粒、ごく 少量の雲母	口径-体部外-横位へら削り 内-内で整形
4	土師器 坏	口径 15.0 遺存高 5.2	1/4遺存	外赤褐色 内黒灰色	白色粒	1/2遺存内外-横位で 体部外-横位へら削り 内-横位へら磨き 仕上げによる両面黒色処理か
5	土師器 鉢	口径 17.0 遺存高 9.3	1/5遺存	外赤褐色 内黒 灰色~暗褐色	白色粒、雲母 砂粒	1/2遺存内外-横位で 体部外-横位へら削り 内-へら削り
6	土師器 高坏	脚部径 7.9 遺存高 5.9	脚部-体部 中位ほぼ全 部	暗赤褐色	白色粒、赤色 粒、長石	坏部内-横位へら磨き後横位へら磨き 坏部-脚部外- 横位及び側位へら削り
7	土師器 高坏	脚部径 - 遺存高 5.2	坏部下位~ 脚部1/2	外淡褐色 内 黒灰色~暗褐色	小粒、雲母	脚部外-横位へら削り 内-へら削り 坏部内 外-横位で整形 外面赤色塗彩
8	土師器 小豆鉢	底径-胴部 遺存高 11.8	1/4遺存	外淡褐色 内暗褐色	白色粒、赤色 粒、雲母	丸底に近い小型でない鉢に想定される。 胴部外-横位へら削り 内-へら削り
9	土師器 鉢?	遺存高 6.0	底径-胴部 1/8遺存	外淡褐色 内暗褐色	白・赤・黄色 粒、雲母	丸底に近い小型でない鉢に想定される。 胴部外-横位へら削り 内-内で整形
10	土師器 手づく ね	口径 7.4 器高 3.5	口径-体部 3/4遺存	赤褐色	白色粒、少量 の赤色粒、雲母	大ぶりの手づくね 体部外-横位へら削り 内-横位で
11	土師器 壺	胴部径 36.8 遺存高 26.3	胴部1/3遺 存	外淡褐色 黒黒 内淡褐色	白色粒、少量 の赤色粒、雲母	胴部外-横位へら削り後で整形 内面の剥離著しい。 内-へら削り
12	土師器 壺	口径 22.2 遺存高 33.2	口径-胴部 1/2遺存	外淡褐色 内淡 褐色~茶褐色	白色粒多量、 長石、雲母	1/2遺存横位で 胴部外-横位-側位へら削り 内-へら削り
13	土師器 壺	底径 7.2 遺存高 1.9	底部全周	外淡茶褐色 内赤褐色	白色粒、砂粒 長石	内外面間で整形



24D住居跡 (第23.24.25.26 図 写真図版9.18.19)

調査区中央のBⅢ-13.14 グリッドに位置し、主軸方位はN-34°-W、平面形は5.2mのほぼ方形で壁高は35~40cmである。周溝は全周するが、カマド両袖真下において立ち上がっている。規模は幅10cmで深さ5~10cmを測る。主柱穴は4本で、柱間寸法はP1-2、P5-6 間で2.3m等間、P2-5、P1-6 間で2.2m等間である。深さはP1-45cm、2-35cm、3-25cm、4-23cm、5-52cm、6-33cmを測る。出入り口はカマド対面のP3、4が該当する。カマドは北西壁中央に位置し、袖部と天井部の一部が良好な状態で遺存してい



23Dカマド土層説明

1. 暗褐色土 淡褐色砂質粘土にロームブロック混入。
2. 淡茶褐色土 淡褐色砂質粘土にローム粒混入。
3. 暗褐色土 淡褐色砂質粘土、黒色土混入層。
4. 黒褐色土 2~3mm大焼土ブロック、ロームブロック混入。
5. 暗赤褐色土 4層置設。焼土ブロックの混入多い。
6. 褐色土 ローム、ロームブロック、焼土粒
7. 淡茶褐色土 ローム、淡褐色砂質粘土混入層。カマド構茶葉。
8. 暗赤褐色土 黒色土、焼土粒、淡褐色砂質粘土混入層。
9. 暗褐色土 黒色土、焼土粒、淡褐色砂質粘土混入層。
10. 褐色土 ローム上に、淡褐色砂質粘土混入。
11. 暗赤褐色土 焼土ブロック、黒色土、焼土化砂質粘土混入層。
12. 暗褐色土 ローム、焼土ブロック、淡褐色砂質粘土混入層。
13. 赤褐色土 焼土化砂質粘土、ローム混入層。
14. 褐色土 ローム、淡褐色砂質粘土混入層。
15. 淡褐色砂質粘土。
16. 暗赤褐色土 焼土ブロック、黒色土、焼土化砂質粘土混入層。
17. 褐色粘土

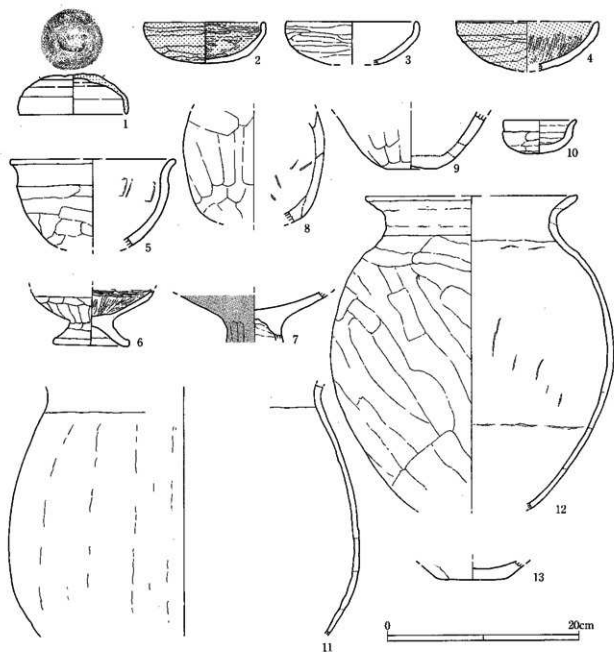
第21図 23D 遺構実測図 (2)

る。火床部は5層下に遺存するが、使用部位の特定はできなかった。袖内側の13層が強く焼けていることから、使い込まれた痕跡が伺われる。灰、焼土の堆積は見られないことから、カマド内の清掃処理後に廃絶していったと考えられる。煙道部は燃焼部奥で30°の角度をもって緩く立ち上がり、一旦フラットとなり、更に30°の角度で立ち上がっている。袖部の構茶は、粘度の高い淡褐色粘土を芯として、淡褐色砂質粘土を積み重ねている。更に19層を上部、側面に補強している。床面はハードロームを掘り込んで、凹凸面にロームを充填して平坦面とした地床である。硬化面はP5と住居コーナー部にかけてと、東壁際部に見られる。覆土は、レンズ状堆積の黒色土~褐色土で、自然埋没層と考えられる。土堤と考えられる土層(3~7.10.12~15層)の堆積が見られる。

遺物は図示したほぼ全体が、床面直上ないしそれに近いレベルの出土である。カマド袖横、前面を中心として東壁側からの出土が多い。注目すべき点はカマド両袖脇の遺物出土状態である。右袖脇では28, 29の甕と34の支脚が横位の状態で、左袖脇では31の甕内から3, 20, 4, 8, 21, 10の坏が重ねられた状態で出土している。甕は本来直立の状態と想定されるが、その背後に35の支脚が立て掛けられている。これらが生活痕跡としての遺棄状態なのか、或いは住居廃絶時の儀式としての行為なのかは判然としない。

第11表 24D 遺物観察表 (1)

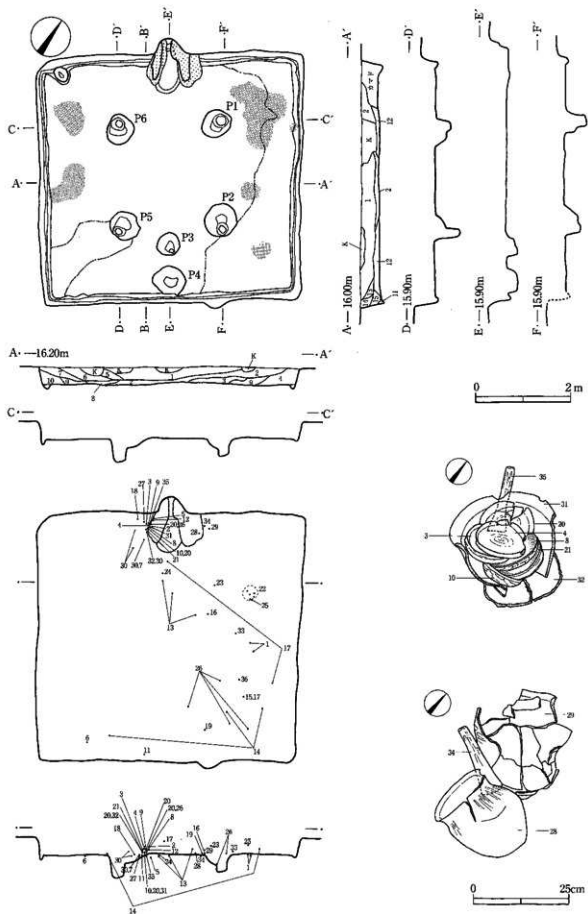
採掘番号	種類	寸法 (cm)	遺存度	色調	胎土	手法上の特徴
25回 1	土師器 坏	口径 12.7 器高 4.0	口縁部 部 欠	外断褐色 内断茶褐色	白色粒、長石	口辺部内外一様な横位へう磨き 体部外一横位へう磨り 内一横位へう磨き 内面にウロコ状の剥離が見られる。 縁上げによる黒色処理が口辺中位と内面全体に見られる。



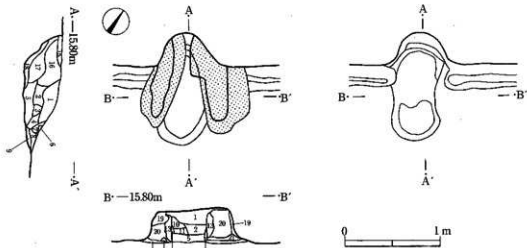
第22図 23D 出土遺物

25回	土師器 杯	口径 器高	12.0 4.0	口縁部一部 欠	外硝褐色 内茶黑色	黑色・白色・ 赤色粒	口辺部横線で 体部外一底部ヘラ削り 内一底部に粗いヘラ磨き 口縁部内側に浅い凹線 炭 素吸着による内面黒色処理
3	土師器 杯	口径 器高	12.0 4.6	ほぼ完形 口縁部一部欠	外硝褐色 内黒褐色	黒色・白色粒 石英、長石	口縁部体部内一細かな横線で 体部外一横位ヘラ削り 炭素吸着による内面黒色処理
4	土師器 杯	口径 器高	12.5 4.4	口縁部一部 欠	淡茶灰褐色	黒色・白色・ 赤色粒、砂粒	口縁部体部内一細かな横線で 体部外一横位ヘラ削り 口縁部内側に浅い凹線 炭素吸着による黒色処理か 口辺中位と内面全体
5	土師器 杯	口径 器高	13.4 4.5	口縁部一部 欠	淡茶黄褐色	白色粒	口辺部外一横線で 内一横位ヘラ磨き 体部外一横位ヘラ削り 内一横位ヘラ磨き
6	土師器 杯	口径 器高	15.9 5.0	完形	外淡茶～赤茶褐 色 内淡茶褐色	白色粒、小礫 石英、雲母	口縁部内外一横線で 体部外一横位ヘラ削り 内一ヘラ磨きで 外面赤色塗削か
7	土師器 杯	口径 器高	13.5 4.7	口縁3/5 体部1/5	淡褐色	白色粒、石英 長石	口縁部外一横線で 体部外一横位ヘラ削り 内一横位ヘラ磨き

第12表 24D 遺物観察表 (2)



第23图 24D遺構実測図(1)



24D土層説明

1. 黒色土 2~5mm大ローム粒, 10~20mm大ロームブロック混入。粘性なく、締まり普通。
2. 黒色土 ローム, 黒色土少量混入。粘性なく、締まっている。
3. 茶褐色土 粘性なく、締まっている。10割程度。
4. 茶褐色土 1~2mm大ローム粒混入。粘性、締まりやや欠ける。
5. 茶褐色土 黒色土、ローム混合層。1~3mm大ローム粒混入。粘り、締まり欠く。
6. 黒褐色土 黒色土少量混入。2~10mm大ローム点在。粘性なく、締まっている。
7. 黒褐色土 2層断面。黒色土の混入やや多い。
8. 茶褐色土 黒褐色土、塊土混合層。ローム少量混入。粘性弱い。
9. 茶褐色土 10mm大ローム点存在。粘性弱く、締まっている。
10. 褐色土 ロームブロック、黒色土混合層。やや締まり欠く。
11. 褐色土 2~3mm大ローム粒, 10~100mm大ロームブロック少量混入。締まる。
12. 褐色土 1層と14層の中間層。5mm大ローム点在。
13. 褐色土 13割程度。ローム粒混入。
14. 褐色土 1~3mm大ローム粒。塊土粒少量混入。

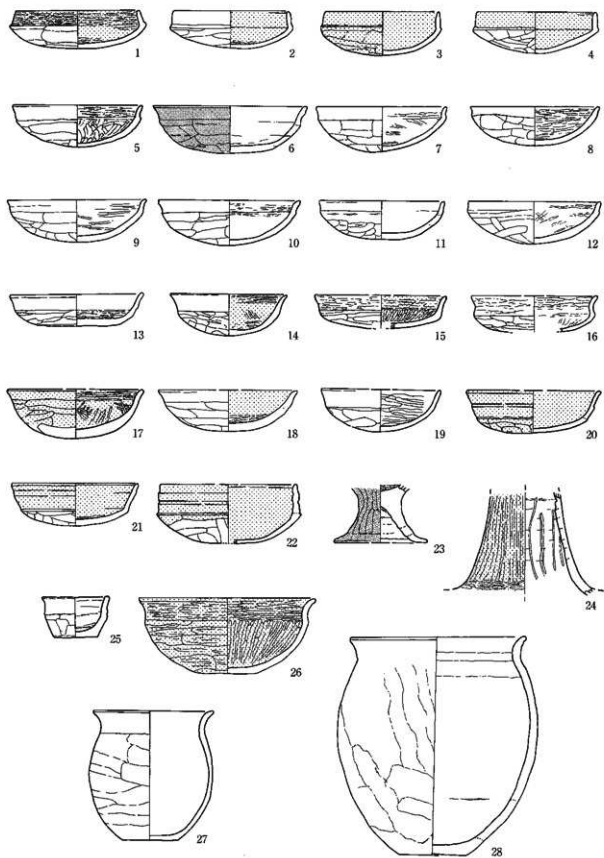
24Dカマド土層説明

1. 暗褐色土 3~4mm大ローム粒混入。塊土粒少量混入。
2. 暗褐色土 淡褐色砂質粘土。ロームブロック混入。
3. 暗赤褐色土 黄土化砂質粘土混入。
4. 暗褐色土 ローム, 黒色土混合層。
5. 暗褐色土 黒色土上に、3mm大ローム粒、塊土粒混入。
6. 暗褐色土 暗褐色土上に、淡褐色砂質粘土混入。
7. 暗褐色土 黒色土、淡褐色砂質粘土、塊土粒混合層。
8. 暗褐色土 黒色土上にローム粒混入。締まっている。
9. 暗褐色土 ローム上に黒色土混入。締まっている。
10. 暗褐色土 淡褐色砂質粘土+暗褐色土。地上粒混入。
11. 暗褐色土 5層断面。黒色土やや少ない。
12. 暗褐色土 黄土化砂質粘土+暗褐色土。
13. 暗赤褐色土 黄土化砂質粘土+暗褐色土。
14. 淡褐色砂質粘土
15. 暗褐色土
16. 淡褐色土 淡褐色砂質粘土、ローム、塊土ブロック混合層。
17. 暗褐色土 ローム中に塊土粒混入。
18. 褐色土
19. 暗褐色土 淡褐色砂質粘土に暗褐色土混入。
20. 淡褐色砂質粘土
21. 暗褐色粘土
22. 褐色土 ローム土、床構築土。

第24図 24D 遺構実測図 (2)

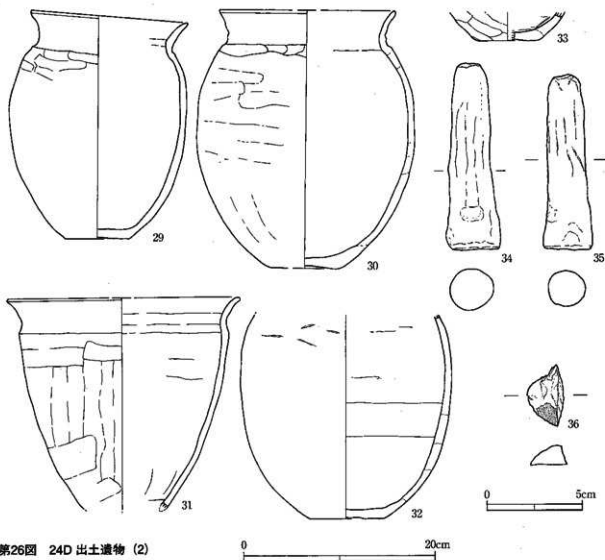
25D8	土師器 坏	口径 器高	13.4 4.1	ほぼ完形	淡褐色一部黒 濁	砂粒、石英、 長石	口辺部外一横線で 体部外一横位へラ削り 内一横位へラ磨き
9	土師器 坏	口径 器高	14.3 4.5	完形	淡褐色	白色粒、石英 長石、小礫	口辺部外一横線で 体部外一横位へラ削り 内一横位へラ磨き後まで整形
10	土師器 坏	口径 器高	14.7 4.8	口縁部一部 欠	外淡褐色 内淡赤褐色	白色粒、石英 黒色粒	口辺部外一横線で 体部外一横位へラ削り 内一横位へラ磨き ざらついた調整が見られる。
11	土師器 坏	口径 器高	13.1 4.1	完形	淡褐色	白色粒主に、 石英	口辺部内外一横線で 体部外一横位へラ削り
12	土師器 坏	口径 器高	14.0 4.5	完形	淡褐色	白色粒、長石 砂粒	口辺部外一横線で 体部外一横位へラ削り 内一横位へラ磨き ウロコ状の調整が見られる。
13	土師器 坏	口径 器高	13.7 3.3	口辺一身体 2/3遺存	茶褐色	白色粒、雲母 砂粒	口辺部内外一横線で 体部外一横位へラ削り 内一横位へラ磨き
14	土師器 坏	口径 器高	12.1 4.4	口辺一身体 2/3遺存	外淡褐色 内黒褐色	白色粒、砂粒	口辺部外一横線で 体部外一横位へラ削り 内一横位へラ磨き 炭素吸着による内面黒色処理
15	土師器 坏	口径 器高	13.6 3.5	口辺一身体 2/3遺存	外鮮一淡茶褐色 内淡赤褐色	白色粒、小礫	口辺部内外一横位へラ磨き 体部外一横位へラ削り 内一放射状へラ磨き 垂上げによる内面黒色処理
16	土師器 坏	口径 器高	13.2 3.8	口辺一身体 1/3遺存	外鮮褐色 内茶 褐色 内面調整	白色粒、雲母	口辺部外一横位へラ磨き 体部外一横位へラ削り 内一横位、放射状へラ磨き
17	土師器 坏	口径 器高	13.8 4.2	口辺一身体 1/3遺存	外鮮海老茶色 内淡褐色一黒 灰色	白色粒、長石	口辺部外一横線で 体部外一横位へラ削り 内一横位へラ磨き 垂上げによる黒色処理を内面全体 と体部中に施す。
18	土師器 坏	口径 器高	14.3 4.3	口辺一身体 2/3遺存	外鮮一淡茶褐色 内黒褐色	白色粒多量、 長石、赤色粒	口辺部内外一横線で 体部外一横位へラ削り 内一横位へラ磨き 炭素吸着による内面黒色処理を施す。
19	土師器 坏	口径 器高	12.3 4.5	口辺一身体 1/3遺存	淡茶褐色	白色粒	口辺部外一横線で 体部外一横位へラ削り 内一横位、縦位へラ磨き

第13表 24D 遺物観察表 (3)



第25图 24D 出土遺物 (1)

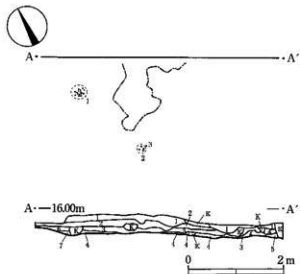
0 20cm



第26図 24D 出土遺物 (2)

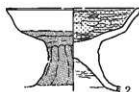
25H	20	土師器 杯	口径 14.0	器高 4.5	ほぼ完形	濃黒色～淡褐色	白色、赤色粒 長石、砂粒	口辺部内外一横線で 体部外一横粒、縦位ヘラ削り 内一ヘラ磨き 炭素吸着による黒色処理を内面に施す。
21	土師器 杯	口径 13.3	器高 4.6	ほぼ完形	外暗褐色 内赤黒色	白色粒	口辺部内外一横線で 体部外一横粒、斜位ヘラ削り 内一ヘラ磨き 炭素吸着による黒色処理を内面全体 と体部中央まで施す。	
22	土師器 杯	口径 14.2	器高 6.2	口辺一体部 1/3	外暗一暗赤褐色 内縁黒～赤褐色	白色・黒色粒 長石・砂粒	口辺部内外一横線で 体部外一縦位、縦位ヘラ削り 内一横線で L線縁部が欠る。炭素吸着による黒色処理 を内面と体部中央まで施す。	
23	土師器 高杯	通身高 6.2	脚部全周		杯部内濃黒色 脚部外暗赤褐色 内暗茶黒褐色	白色粒主に赤 色粒少量	脚部外一縦位ヘラ削り後脚部横線で 内一ヘラなどで 杯部内一ヘラ磨き 脚部外面赤色塗彩か 杯部内面炭素吸着による黒色処理	
24	土師器 高杯	通身高 10.8	脚部1/2		外暗褐色 内淡褐色	白色粒、石英 砂粒	脚部外一縦位ヘラ磨き後など 裾部横位ヘラ磨き 内一縦位ヘラなどで裾部横線で 漆仕上げによる黒色処理 か 脚部外面に施す。	
25	土師器 小型鉢	口径 6.6	器高 4.3	完形 底径 4.6	淡茶黄褐色	白色粒主に赤 色粒少量	内外面ヘラなどで整形	
26	土師器 鉢	口径 18.6	器高 8.0	底径 6.0	口辺部1/5 体部 1/3 底径 3/4	赤褐色一部黒斑	白色粒、石英 砂粒	口辺部内外一横位ヘラ磨き 体部外一横位ヘラ削り後横 位ヘラ磨き 内一縦位ヘラ磨き 漆仕上げによる内面黒 色処理か
27	土師器 小型甕	口径 12.7	器高 13.7	胴部一短欠 底径 6.0	暗茶褐色	白色粒、砂粒	口辺部横線で 胴部外一横位ヘラ削り 内一ヘラなどで 内外面二次焼成による剥離着色しい。	

第14表 24D 遺物観察表 (4)



25D土層観測

1. 明褐色土 耕作土。砂を多量に混入。粘性普通。締まり弱い。
2. 明褐色土 耕作土。砂を少量混入。粘性。締まり普通。
3. 黒褐色土 2-3mm大ローム粒混入。粘性強く、締まり普通。
4. 茶褐色土 ローム上に黒色土少量混入。粘性。締まり強い。
5. 黒褐色土 黒色土上にローム粒少量混入。粘性。締まり普通。
6. 黒褐色土 1層類似。ローム粒混入。粘性普通。締まり強い。
7. 茶褐色土 2層類似。やや明るい。粘性普通。締まり弱い。



0 20cm

第27図 25D 遺構実測図

第15表 24D 遺物観察表 (5)

25層	28	土師器 甕	口径 器高 底径	18.5 23.0 6.0	ほぼ完形	淡橙褐色一部黒 斑	白色粒、雲母	口辺部横なで 胴部外一横位へラ削り後なで整形 内へラなで 胴部上半外面部分的に、内面は全体に割 離著しい。
26層	29	土師器 甕	口径 器高 底径	16.8 23.5 6.7	完形	外茶褐色～黒褐 色 内淡橙褐色	白色粒、石英 砂粒	口辺部横なで 胴部外一横位へラ削り後なで 内へラなで 胴部外面葆状凹形物顕著 内面ウロコ状の割 離著しい。
30		土師器 甕	口径 器高 底径	18.2 27.5 7.0	口辺部1/6 胴部 1/3 底部 1/3	外暗褐色 内淡橙褐色	白色粒、石英 砂粒	口辺部横なで 胴部外一上横位へラ削り、下半削り へラ削り後全体になで 内へラなで
31		土師器 甕	口径 底径 遺存高	24.8 7.6 22.5	底端部欠	淡橙褐色	白色粒、石英 砂粒	口辺部横なで 胴部外一横、縦位へラ削り後なで 内へラなで
32		土師器 甕	口径 底径 遺存高	18.2 7.6 21.5	胴一底部 1/3	外赤～黒褐色 内淡茶褐色	白色粒、石英 砂粒	胴部内外へラなで 胴部上半外面葆状凹形物下半部 二次焼成による赤変 内面は割離著しい
33		土師器 甕	口径 底径 遺存高	6.6 6.6 3.1	底部1/2	淡茶褐色	白色粒、長石 雲母	胴部外一斜位へラ削り 内へラなで整形
34		土製品 支脚	全長 基底幅	19.8 5.2	完形	橙褐色	白色粒、石英	上部～中位 二次焼成による割離 へラなで整形 重さ551.3g
35		土製品 支脚	全長 基底幅	18.3 4.8	完形	淡茶褐色	砂粒、石英	上部と半面の上部～下端に二次焼成の割離
36		使用痕 ある石	全長3.3 最大幅	1.9	重さ60g	下面に摩耗痕が見られる。		

25D住居跡 (第27図 写真図版10.20)

調査区中央北側のCⅡ-8グリッドに位置する。硬化面とその周囲に出土した遺物のみで規模等は不明である。硬化面は1.3mの範囲でソフトローム上面に広がっている。掘り込みの浅い堅穴住居跡と想定される。覆土は3.4.5層で、黒色土を主体とした層である。その他の施設は検出されなかった。

遺物は3点のみで硬化面と同レベルでの出土であり、床面直上遺物である。

第16表 25D 遺物観察表 (1)

採出番号	器種	寸法 (cm)	遺存度	色調	胎土	手法上的特徴
27図 1	土師器 杯	口径 器高	18.3 5.8	完形	暗褐色	白色粒、雲母 口辺部、体部内一横なで 体部外一横位へラ削り 口縁 端部内側で凹縁顕著 炭素灰著による両面黒色処理 内 面割離顕著

第17表 25D 遺物観察表 (2)

2	土師器 高坏	口径 遺存高	14.0 8.7	口辺~脚部 1/2	外淡赤褐色 内黒色	白色粒, 雲母	坏部外~口辺積んで, 体部横位へラ削り 脚部外~縦位へラ削り, 裾部積んで 内へラなどで 坏部炭素吸着による黒色処理を口辺部~ 内面全体に施す。坏部口辺積部~脚部にかけて赤色塗彩 脚部外~縦位へラ削り後脚部横位へラなどで 内へラなどで
3	土師器 高坏	遺存高	7.5	脚部全周	外淡赤褐色 内黒褐色	石英多量, 小 礫, 赤色粒	

第3節 平安時代

今回の調査では竪穴住居跡2軒, 掘立柱建物跡1棟を検出した。時期は9世紀中ば~後半に位置づけられる。竪穴住居跡の主軸方位はN-W方向とW-E方向とばらつきが見られる。カマド位置についても北及び西とばらつきがある。平面規模は3m~3.25m程度である。掘立柱建物跡については2間×2間の欄柱式で, N-W方向の主軸方位をとる。詳細については後述したい。遺物では, 土師器類では土師器坏, 皿, 小型甕, 甕, 須恵器坏, 甕, 大型甕があり, 他に砥石, 刀子が出土している。以下, 各遺構と出土遺物について概要を述べていくこととする。

21D住居跡 (第28.29図 写真図版6.16)

調査区東側中央のCⅢ-4グリッドを中心に位置し, 主軸方位はN-50°-E, 平面形は2.8m×3.05mのややいびつな方形で, 壁高は30~32cmである。周溝は全周する。カマド両袖下においても周回している。規模は幅10~15cm, 深さ7~8cmを測る。主柱穴はなく, カマド対面に入出口ピットが検出された。25cmの円形で深さ15cmを測る。カマドは北東壁中央に位置し, 袖部は良好な状態で遺存する。火床部は袖部中程の6層下で焼土, 炭化物, 黒色土が堆積している。煙道部は燃焼部奥で30°の角度をもって緩く立ち上がり, 更に壁の中場で23°の角度で立ち上がっている。袖部の構築は, 粘度の高い白色粘土を芯として, 淡褐色砂質粘土を積み重ねている。部分的にローム, 黒色土の混合土や焼土粒, 焼土ブロック混入の暗褐色土を補強している。床面はハードローム直下まで掘り, 凹凸面にロームを充填して平坦面とした地床である。硬化面は, 入出口ピット前から直線上にカマド前面に顕著である。覆土はロームブロック混じりの暗褐色土を主体とした, 人為的埋め戻し土である。

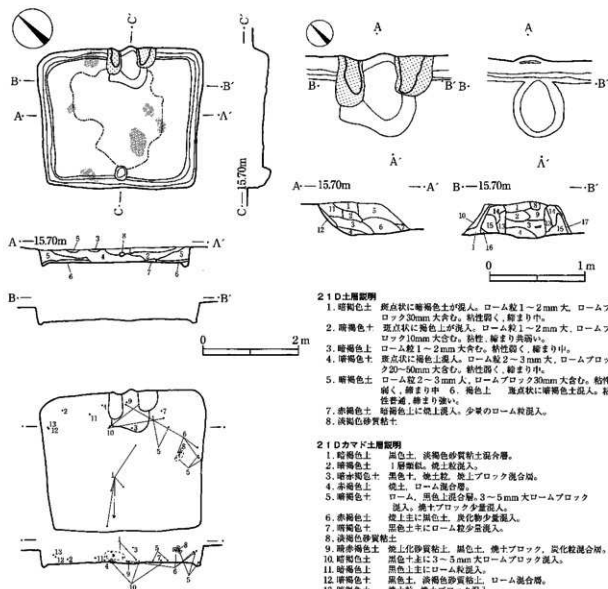
遺物は人為的埋め戻しのため, 1, 2, 3の明らかな混入遺物は別として, 住居使用時~廃絶時に近い時期の遺物と判断している。9の甕はカマド廃絶時の儀式として, 焚き口に倒立させた状態で出土している(写真図版6)。また, 住居中央のやや東寄りとかマド横, 入出口ピット横に焼土が検出された。

第18表 21D 遺物観察表 (1)

検出番号	器種	寸法 (cm)	遺存度	色調	胎土	手法上的特徴
29四1	土師器 坏	口径 器高	11.2 4.0	口辺一体部 2/3	淡赤褐色	雲母多量, 黒色粒, 白色粒 口辺一体部外~横位へラ削り 内~横位へラ磨き後などで 整形。壁仕上げによる内面黒色処理
2	土師器 手づく ね	底径 遺存高	3.9 1.9	口辺部欠	暗赤黒褐色	白色粒主に赤色粒少量 内外~預などで 指痕状顕著。
3	土師器 手づく ね	底径 遺存高	1.8	口辺部欠	暗赤黒褐色	白色粒 内外へラなどで 底面丸底状。
4	須恵器 坏	口径 器高 底径	121 4.1 6.3	ほぼ完形 口縁一部欠	灰白色	白色粒, 小礫 体部下縁回転へラ削り, 底部切離しは回転糸切り後未調整。
5	土師器 坏	口径 器高 底径	13.2 4.0 6.9	ほぼ完形	暗褐色	白色粒, 黒色粒主に雲母, 石英少量 体部下縁手持ちへラ削り, 底部切離しは回転糸切り? 後底部再調整。

29	6	土師器 钵	口径 器高 底径	11.8 3.8 6.8	口辺～底部 1/2	淡褐色	白色粒, 小礫	体部下端及び底部周縁回転ヘラ削り, 切離しは回転糸切り。
7	土師器 杯	口径 器高 底径	12.2 3.4 6.8	口辺～底部 1/2	淡褐色	白色粒, 小礫 雲母	体部中位～下端回転ヘラ削り, 切り離し不明。	
8	土師器 皿	口径 器高 底径	13.2 2.2 5.1	定形	淡茶褐色	白色粒主に赤 色粒ごく少量	切り離しは回転糸切り。底部周縁ヘラ削り調整と削り出しにより高台をつくる。底部外周中央に「青井」の蓋書あり。	
9	土師器 盃	口径 器高 底径	13.0 13.1 5.1	L1辺部1/2 胴部1/3 欠	外明褐色～茶褐色 内暗褐色～ 赤褐色	白色粒主に小 礫	口辺部内外, 外面ヘラ削り痕接ぎで。胴部外一縦位ヘラ削り後下半部横位・斜位ヘラ削り。胴部内ヘラなどで。	
10	土師器 壺	口径 器高 底径	8.5 2.5 2.5	底部一部欠	暗茶黒褐色	白色粒	底部内外～などで整形。胴部外～下端ヘラ削り。	
11	石製品 砥石	縦長5.1 横長2.4 厚さ1.9 重さ33.2g 凝灰岩製	黒灰色	上部に8mmの通し孔が見られ, 換行用と想定される。四面に縦～斜方向の擦痕が見られる。定形				

第19表 21D 遺物観察表 (2)



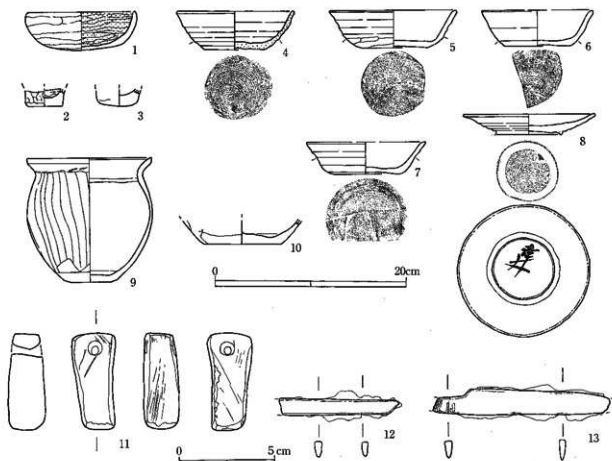
第28図 21D 遺構実測図

21D土層説明

1. 暗褐色土 斑点状に暗褐色土が混入。ローム粒1～2mm大。ロームブロック30mm大含む。粘性弱く、締まり中。
2. 暗褐色土 斑点状に褐色土が混入。ローム粒1～2mm大。ロームブロック10mm大含む。粘性、締まり弱く、締まり中。
3. 暗褐色土 斑点状に褐色土混入。ローム粒2～3mm大、ロームブロック20～50mm大含む。粘性弱く、締まり中。
4. 暗褐色土 ローム粒2～3mm大。ロームブロック30mm大含む。粘性弱く、締まり中。褐色土 斑点状に暗褐色土混入。粘性普通、締まり強い。
5. 赤褐色土 暗褐色土に微上混入。少量のローム粒混入。
6. 淡褐色土 暗褐色土に微上混入。

21Dカマド土層説明

1. 暗褐色土 黒色土、淡褐色砂質粘土混合層。
2. 暗褐色土 I層類似。焼土粒混入。
3. 暗褐色土 黒色土、焼土粒、焼土ブロック混合層。
4. 暗褐色土 焼土、ローム混合層。
5. 暗褐色土 ローム、黒色土混合層。3～5mm大ロームブロック混入。焼土ブロック少量混入。
6. 赤褐色土 焼土主に黒色土。炭化物少量混入。
7. 暗褐色土 黒色土中にローム粒少量混入。
8. 淡褐色土 焼土粒、焼土ブロック混入。
9. 淡褐色土 焼土上化砂質粘土。黒色土、焼土ブロック、炭化粒混合層。
10. 暗褐色土 黒色土上に3～5mm大ロームブロック混入。
11. 暗褐色土 黒色土上にローム粒混入。
12. 暗褐色土 黒色土、淡褐色砂質粘土。ローム混合層。
13. 暗褐色土 焼土粒、焼土ブロック混入。
14. 淡褐色土 砂質粘土
15. 淡褐色土 白色粘土
16. 褐色土 ローム、黒色土混合層。
17. 暗褐色土 ローム、暗褐色土混合層。



第29図 21D 出土遺物

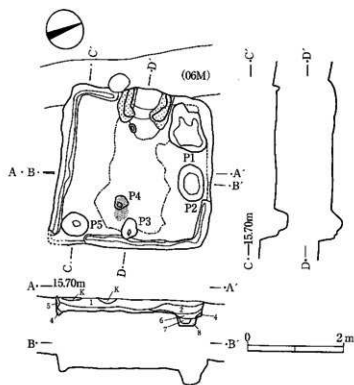
第20表 21D 遺物観察表 (3)

29図 12	鉄製品 刀子	遺存長6.3 幅0.8 重さ4.9g 基部を欠損する。
13	鉄製品 刀子	遺存長9.2 刃部幅1.1 基部幅0.9 重さ11.4g 基部の一部と先端部を欠損する。基部に木質部及び針金状の金具が遺存している。

22D住居跡 (第30.31.32図 写真図版7.17)

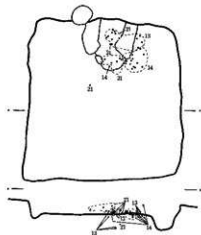
調査区中央やや東寄りのCⅢ-6.10グリッドに位置し、06M溝状遺構に切られる。主軸方位はN-52°-W、平面形は3.4m×3.2mのややいびつな方形で壁高は25~30cmである。周溝は北壁側と南東コーナーで検出されなかったが、他かでは周回する。規模は幅15~25cmで深さ6~7cmを測る。主柱穴はなく、P1~P5が検出された。この内、出入り口ピットに想定されるのがP3で、42cm×33cmの楕円形で深さ23cmを測る。P1は浅い掘り込みだが、貯蔵穴か。P2.4.5については性格の特定はむずかしい。カマドは西壁中央に位置し、袖部は良好に遺存する。火床部は5層ドで焼土ブロックの混入が見られる。煙道部は燃焼部奥で22°の傾斜で立ち上がってフラットとなるが、上部は06M溝状遺構に切られる。袖部の構築は、粘度の高い褐色粘土を芯として、砂質粘土を積み上げている。床面はソフトローム中の地床でP3前から直線上に硬化面が検出された。覆土は1層に見られる暗茶褐色土が斑点状に含まれる状況を考慮すると自然埋没層か。

遺物はカマド中・脇を中心に、住居中央、P1上層から出土している。カマド中出土の13.14.16.18.21と袖上出土の9は本跡に伴う遺物として判断している。また、手づくね土器が15点以上出土しているが各

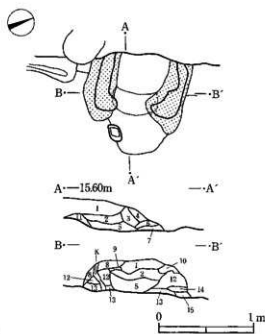


22D土層説明

1. 暗茶褐色土 暗茶褐色土斑点状に混入。横上較少量混入。粘性弱く、締まりやや欠く。
2. 暗茶褐色土 1層類似。暗茶褐色土の混入少ない。横土は稀少量。
3. 暗茶褐色土 1層類似。ローム粒若干混入。締まっている。
4. 暗褐色土 ローム粒混入。締まりやや欠く。
5. 暗茶褐色土 ローム粒ほとんど含まない。粘性弱い。
6. 暗茶褐色土 断面部のローム含む。締まりやや見られる。
7. 茶褐色土 断面ロームモル。締まりやや見られる。
8. 茶褐色土 ローム粒主体。締まり強い。



第30図 22D 遺構実測図

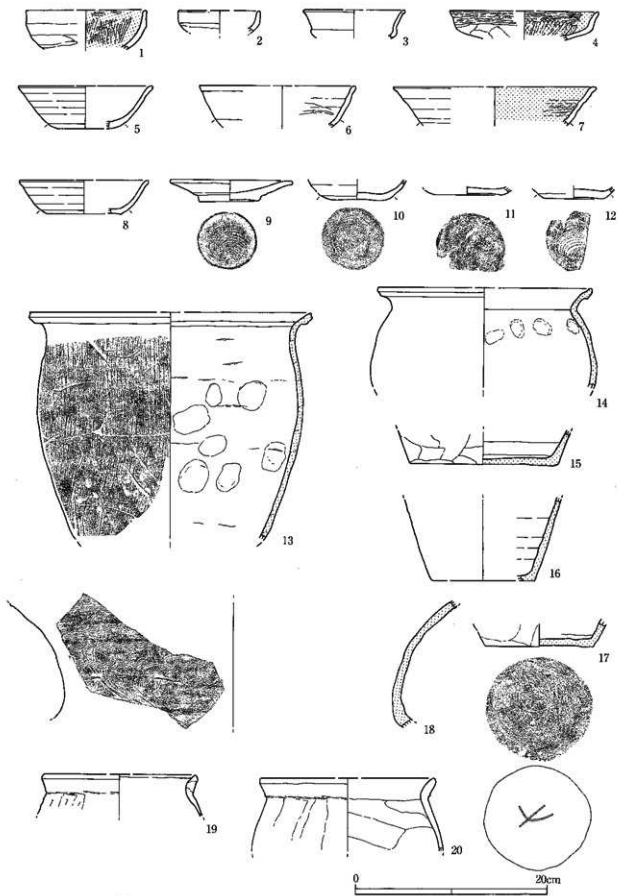


220カマド土層説明

1. 黒褐色土 淡褐色砂質粘土混入。
2. 暗褐色土 淡褐色砂質粘土。粘土粒混入。
3. 淡褐色土 淡褐色砂質粘土上に黒色土混入。
4. 暗褐色土 暗褐色土。淡褐色砂質粘土混入層。
5. 暗褐色土 ローム粒。焼土ブロック混入。
6. 暗褐色土 4層類似。黒色土が含まれる。
7. 暗褐色土 ローム。黒色土混入層。
8. 黒褐色土 黒色土上に淡褐色砂質粘土混入。
9. 淡赤褐色土 焼土化砂質粘土。黒色土混入層。
10. 淡褐色土 淡褐色砂質粘土中に黒色土少量混入。
11. 暗褐色土 ローム。黒色土混入層。
12. 淡褐色砂質粘土 カマド袖部分。
13. 褐色粘土
14. 暗褐色土 淡褐色砂質粘土+暗褐色土。

第21表 22D 遺物観察表 (1)

挿入番号	器種	寸法 (cm)	遺存度	色調	胎土	手法上の特徴
31回	1 土師器 環	口径 12.5 遺存高 4.1	口辺～体部 1/5 遺存	外赤褐色 内黒灰色	白色粒, 赤色 粒, 雲母	口辺部外～横などで 体部外～縦位へラ削り 内 ～縦位へラ磨き 炭素吸着による黒色処理
2	土師器 環	口径 8.4 遺存高 2.3	口辺～体部 1/5 遺存	茶褐色	白色粒, 雲母	体部内～内で整形 外～縦位へラ削り
3	土師器 環	口径 10.6 遺存高 2.9	口辺～体部 1/5 遺存	白澄褐色	赤色粒	口辺部横などで 体部外～不明瞭だがへラ削り 口縁は玉縁状になっている
4	土師器 環	口径 15.5 遺存高 3.0	口辺～体部 1/6 遺存	淡茶褐色	白色粒, 石英	口辺部内外横位へラ磨き 体部外～横位へラ削り 内～放射状へラ磨き 律仕上げによる内面 黒色処理
5	土師器 環	口径 14.1 器高 4.4 底径 6.0	口辺～底部 1/5 遺存	外輪褐色 内淡褐色	白色粒, 雲母	口クロ使用 体部下端回転へラ削り調整
6	土師器 環	口径 15.6 遺存高 3.7	口辺～体部 1/5 遺存	淡褐色	長石, 雲母 小礫	口クロ使用 体部下端回転へラ削り調整 内面磨き状のなで調整
7	土師器 環	口径 21.4 遺存高 4.1	口辺～体部 1/5 遺存	淡褐色 内黒色処理?	長石, 雲母 小礫	口クロ使用 体部下端回転へラ削り調整 内面 横位へラ磨き後磨きによる黒色処理か。
8	土師器 環	口径 13.6 器高 3.6 底径 7.8	口辺～底部 1/5 遺存	淡褐色～茶 褐色	白色粒, 雲母 長石	口クロ使用 体部下端回転へラ削り調整
9	土師器 環	口径 13.0 器高 2.4 底径 6.3	完形	淡褐色	白色粒, 小礫	口クロ使用 底部切り離しは回転糸切り後高台 を貼付。
10	土師器 環	口径 21.7 遺存高 2.1	底部～体部	淡褐色	長石, 白色粒 雲母少量	口クロ使用 体部下端回転へラ削り調整 底部 回転糸切り後回転へラ削り調整
11	土師器 環	口径 7.3 遺存高 0.9	底部～体部	淡褐色	長石, 石英	口クロ使用 底部切り離しは回転へラ削り。
12	土師器 環	口径 6.9 遺存高 1.3	底部1/4	褐色	小礫, 白色粒 雲母	口クロ使用 体部下端回転へラ削り調整 底部 回転糸切り後回転へラ削り調整
13	須恵器 甕	口径 29.4 遺存高 24.0	口辺～胴下 半1/5	灰褐色	赤色粒, 白色 粒, 雲母	胴部外～平行叩き目文 内～片で共焼 粘土結 核部から概3cm程度の粘土被覆み上げ成形
14	須恵器 甕	口径 22.2 遺存高 10.5	口辺～胴下 半1/3	淡灰褐色	長石, 白色粒	胴部外～水焼きないし横位などで整形, 内～放射 状磨, などで整形
15	須恵器 甕	口径 15.6 遺存高 3.5	底部～胴下 端の一部	暗赤褐色	赤色粒, 白色 粒, 雲母	胴部外～下端部へラ削り, 内～などで整形
16	須恵器 甕	口径 10.8 遺存高 8.6	底部～胴下 半全周	淡青灰色	白色粒, 白色 針状物 2～3mm 大黒青色粒	胴部外～下位～下端横位へラ削り, 上部に平行 叩き目文
17	須恵器 甕	口径 11.3 遺存高 2.1	底部全周	暗青灰色	長石, 白色粒 雲母, 小礫	胴部外～下端部横位へラ削り, 底部外面中央に 焼成痕のへらによる刻痕「七」が見られる。
18	須恵器 甕	素人遺存径 46.0	口辺部一部	淡青灰色	長石, 白色粒 雲母	4本単位の波状文がめぐる。
19	土師器 甕	口径 15.8 遺存高 4.3	口辺部1/4	外暗茶褐色 内黒茶褐色	赤色粒, 白色 粒, 雲母	口辺内外横などで 胴部外～縦位へラ削り, 内～ などで整形
20	土師器 甕	口径 18.2 遺存高 7.7	口辺部のみ	淡褐色	赤色粒, 白色 粒, 雲母, 長石	口辺内外横などで 胴部外～縦位へラ削り, 内～ 横位へラなどで
32回	土師器 甕	口径 21.0 遺存高 20.4	口辺～胴下 半ほぼ全周	暗茶褐色	白色粒, 小礫 少量の雲母	口辺内外横などで 胴部外～縦位へラ削り後などで 整形 内～などで整形
22	土師器 手づくね	口径 5.8 器高 1.8	底部2/3 底径 5.0	暗褐色	白色粒, 雲母	などで整形
23	土師器 手づくね	口径 5.0 遺存高 1.9	底部1/2	暗茶褐色	白色粒, 雲母	などで整形
24	土師器 手づくね	口径 5.0 器高 1.3	底部2/3 底径 4.0	淡茶褐色	白色粒, 雲母 長石	内外両共に指痕痕明瞭, 折などで整形
25	土師器 手づくね	口径 6.0 器高 1.9	底部2/3 底径 5.0	外淡褐色 内黒茶褐色	白色粒, 雲母 石英	外～指などで 内～などで整形



第31图 22D出土遺物(1)



第32図 22D出土遺物(2)

個体の出土地点、出土レベルがばらばらであり、本遺構に伴う遺物か否かは手づくね祭祀の存続時期や古墳時代後期の混入遺物としての可能性を考慮しても判定はむずかしい。

第22表 22D遺物観察表(2)

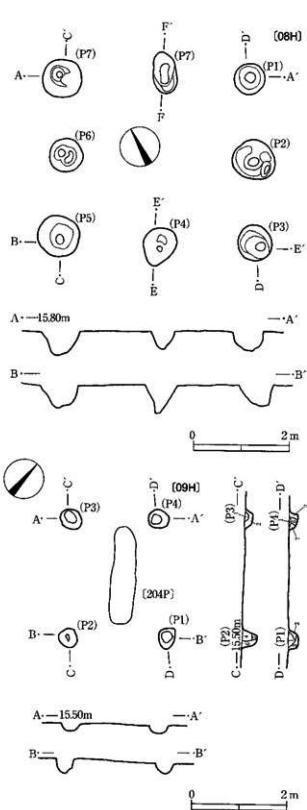
32図	土師器 手づくね	口径 器高	5.6 2.2	底部1/2 底径	5.0	淡茶褐色	白色粒	内外面共に指などで整形
27	土師器 手づくね	底径 遺存高	4.8 2.0	底部全周		暗茶褐色	白色粒、雲母	内外面共に手で整形
28	土師器 手づくね	口径 器高	4.9 2.3	底部2/3 底径	5.0	外淡茶褐色 内黒茶褐色	白色粒、雲母 砂粒	内外面共に手で整形
29	土師器 手づくね	口径 器高	5.6 1.7	底部1/3 底径	5.1	暗褐色	白色粒、雲母	内外面共に手で整形
30	土師器 手づくね	口径 器高	5.3 1.2	底部2/5 底径	4.6	淡褐色	白色粒、雲母 長石	内外面共に手で整形
31	土師器 手づくね	口径 器高	4.5 2.7	底部1/2		暗褐色	白色粒、雲母	内外面共に手で整形
32	土師器 手づくね	底径 遺存高	5.4 1.9	底部全周		暗茶褐色	白色粒、雲母	内外面共に手で整形
33	土師器 手づくね	口径 器高	6.2 1.6	底部3/4 底径	5.9	茶褐色	白色粒、雲母	内外面共に手で整形 底部本裏板
34	土師器 手づくね	口径 遺存高	5.1 2.7	底部1/3 底径	3.6	暗褐色	白色粒、赤色 粒	輪積み後指などで整形
35	土師器 手づくね	底径 遺存高	4.0 2.2	底部全周		暗茶褐色	白色粒、雲母	輪積み後、手で整形 底部外面に「×」のヘラ書き
36	土師器 手づくね	口径 遺存高	4.8 3.2	底部1/3		外淡褐色 内黒茶褐色	白色粒、雲母	輪積み後、ヘラなどで整形

第4節 掘立柱建物跡

本遺構については各時代の概要で触れているため、08Hが平安時代、09Hが古墳時代後期に帰属することのみで各遺構の概要に移りたい。

08H掘立柱建物跡(第33図 写真図版10)

調査区中央やや東寄りのCⅢ-7.11グリッドに位置し、06M溝状遺構に切られる。規模は2間(4.1m)×2間(3.6m)で、桁行方位はN-64°-Wである。柱間寸法は桁行2.05m等間、梁行1.8m等間を測る。掘り方規模は70~90cmの円形で、深さ40~60cmを測る。掘り方覆土は、全体としては部分的に盛り固められた層の残存と柱抜き取り後の再堆積層が主体的である。P4において柱の立ち腐れと想定される土層堆積が見られる。22Dと同一方位をとる。遺物は出土しなかった。



第33図 08H・09H 遺構実測図

08H C-C' 竊土層説明

- (P4)
 1. 暗褐色土 当土上、ローム混合層、粘土層から。
 2. 暗褐色土 1層厚。当土の境入り。
 3. 暗褐色土 ローム減少層。
 4. 暗褐色土 1層厚。5mm大ローム散見。
 5. 暗褐色土 暗褐色土。
 6. 暗褐色土 暗褐色土、ローム混合層、層まっている。
 7. 暗褐色土 暗褐色土、ローム混合層、ローム粒が多い。
 8. 暗褐色土 暗褐色土、ローム混合層、暗褐色土が多い。
 9. 暗褐色土 ローム粒上に暗褐色土混入。
 10. 暗褐色土 暗褐色土、ローム混合層、やや軟弱。
 11. 暗褐色土 当土上、ローム、ロームブロック混合層。
 12. 暗褐色土 ローム粒上に暗褐色土混入。

- (P4)
 1. 暗褐色土 暗褐色土、ローム混合層、粘土層から。
 2. 暗褐色土 ローム粒散見。
 3. 暗褐色土 ローム粒散見に入る。
 4. 暗褐色土 2層厚。暗褐色土、暗褐色土が多い。
 5. 暗褐色土 暗褐色土、ローム混合層、やや硬まる。
 6. 暗褐色土 暗褐色土、ローム混合層、やや軟弱。
 7. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見、層まっている。
 8. 暗褐色土 ローム粒散見、暗褐色土少量混入、層まっている。
 9. 暗褐色土 ローム粒散見、暗褐色土少量混入、層まっている。

- (P4)
 1. 暗褐色土 暗褐色土、ローム混合層、粘土層から。
 2. 暗褐色土 ローム粒散見。
 3. 暗褐色土 暗褐色土、ローム混合層、ローム粒が多い。
 4. 暗褐色土 当土上、ローム混合層、ローム粒散見に入る。
 5. 暗褐色土 暗褐色土、ローム混合層、2-3mm大ローム粒散見に入る。
 6. 暗褐色土 暗褐色土、ローム混合層、層まっている。
 7. 暗褐色土 暗褐色土、ローム混合層、層まっている。
 8. 暗褐色土 7層厚。暗褐色土の境入りが多い。

08H D-D' 竊土層説明

- (P8)
 1. 暗褐色土 ローム粒散見から。炭化。残す少量含む。数字層から硬まる。
 2. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見。
 3. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見。
 4. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見、やや硬まっている。
 5. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見、やや硬まっている。
 6. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見、層まっている。
 7. 暗褐色土 ローム、ロームブロック混合層、層まっている。
 8. 暗褐色土 ローム。
 9. 暗褐色土 暗褐色土、ローム混合層、粘土層から。
 10. 暗褐色土 ローム、暗褐色土、2-3mm大ローム粒散見、粘土層から。
 11. 暗褐色土 ローム粒上に、暗褐色土少量混入、粘土層から。
 12. 暗褐色土 ローム粒上に、暗褐色土少量混入、層まっている。
 13. 暗褐色土 ローム粒上に、ロームブロック少量混入、層まっている。

08H E-E' 竊土層説明

1. 暗褐色土 暗褐色土、ローム混合層、粘土層から。
 2. 暗褐色土 1層厚。暗褐色土の境入りが多い。
 3. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見。
 4. 暗褐色土 2層厚。暗褐色土、暗褐色土の境入りが多い。
 5. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見。
 6. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見。
 7. 暗褐色土 ローム粒上に暗褐色土混入、層まっている。
 8. 暗褐色土 ローム粒上に、暗褐色土少量混入。
 9. 暗褐色土 ローム。
 10. 暗褐色土 ローム、暗褐色土、暗褐色土の境入りが多い、層まっている。

08H F-F' 竊土層説明

1. 暗褐色土 暗褐色土、ローム混合層、粘土層から。
 2. 暗褐色土 1層厚。暗褐色土の境入りが多い。
 3. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見。
 4. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見。
 5. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見、層まっている。
 6. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見。
 7. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見。
 8. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見。
 9. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見。
 10. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見。
 11. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見、層まっている。

09H 層説明

1. 暗褐色土 暗褐色土、ローム混合層、粘土層から。
 2. 暗褐色土 1層厚。暗褐色土の境入りが多い。
 3. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見。
 4. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見。
 5. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見。
 6. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見。
 7. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見。
 8. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見。
 9. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見。
 10. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見。
 11. 暗褐色土 暗褐色土、ローム粒散見、層まっている。

09H掘立柱建物跡 (第33図 写真図版10)

調査区北東コーナーのDⅢ-2グリッドに位置する。規模は1間(1.75m~2.0m)×1間(2.5m)で、桁行方位はN-44°-Eである。掘り方規模は40~45cmの円形で、深さ15~40cmを測る。掘り方の覆土は全体的に自然埋没層で、P2においてわずかに撞き固められた6層と柱抜き取り後の土層堆積が観察される。19D、20Dと同一方位をとる。遺物は出土しなかった。

第5節 ビット・溝状遺構

時期不明のビット2基と中世~近世以降と想定される溝状遺構5条を検出した。溝状遺構については重複関係から04M→01M、05M、01M→06Mへと新しくなることが確認された。以下、各遺構について述べていくこととする。

203P土坑 (第34図 写真図版11)

調査区中央やや東寄りのCⅢ-11グリッドに位置する。重複はなく良好に遺存する。ややいびつな円形で、0.54m×0.62m、深さ0.3mを測る。壁面は片側で角度をもって、他方でやや緩やかに立ち上がる。底面は平坦を意識していない。掘立柱建物の掘り方の覆土に相似しているが、他の掘り方は検出されなかった。1、2層が再堆積層で、他層は撞き固めた層と想定される。遺物は出土しなかった。

204P土坑 (第34図 写真図版10)

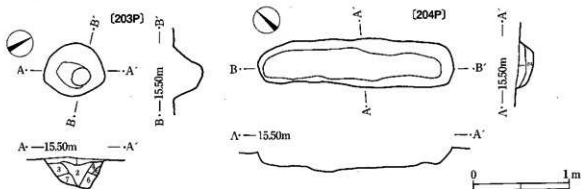
調査区北東コーナーのDⅢ-2グリッドに位置する。09Hと重複する。2.1m×0.51mの楕円形で、深さ0.22mを測る。長軸方位はN-36°-Eである。壁面は63°の角度で立ち上がる。底面はやや凹凸が見られるが、おおむね平坦である。覆土は暗褐色土の自然埋没層である。遺物は出土しなかった。

01~06M溝状遺構 (第35.5図 写真図版1)

01Mは、調査区南東から北西に縦走する溝で06Mに切られ、04Mを切っている。規模は幅0.85m、深さ0.1~0.22mを測る。覆土は暗褐色土の自然埋没層である。

02Mは、調査区南側のBⅣ-5グリッドに位置する。04Mと重複するが、前後関係は不明である。規模は幅1.05m、深さ0.19mを測る。覆土は暗褐色土の自然埋没層である。

04Mは、調査区内でコの字状の平面プランをもち、02Mと重複関係にある。また01M、05Mに切られる。



第34図 203P・204P遺構実測図

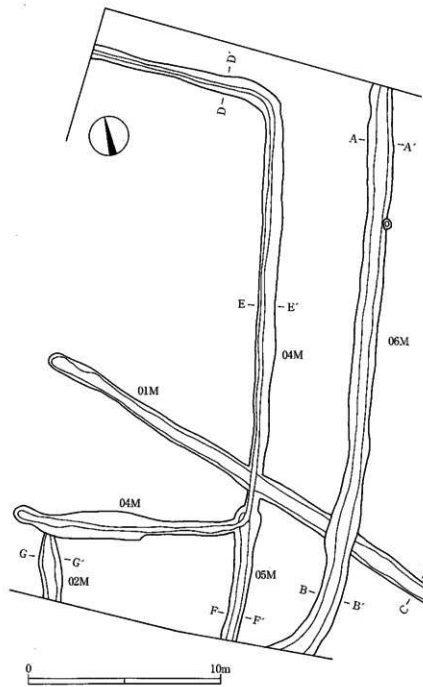
203P土層説明

1. 暗褐色土 褐色土が斑点状に少量混入。粘性層より共にやや弱い。
2. 暗褐色土 褐色土が斑点状に少量混入。粘性層より共に。
3. 暗褐色土 褐色土が斑点状に少量より多く混入。粘性層より共に。
4. 暗褐色土 褐色土が斑点状に多量に混入。粘性層より共にやや強い。
5. 褐色土 暗褐色土が斑点状に少量混入。粘性層より共にやや強い。

6. 褐色土 褐色土が斑点状に少量混入。粘性層より共に。
7. 褐色土 褐色土が斑点状に多量に混入。粘性層より共に。

204P土層説明

1. 暗褐色土 褐色土が斑点状に少量混入。粘性層より、層よりやや弱い。
2. 暗褐色土 1層より多く褐色土が斑点状に混入。粘性層より、層よりやや弱い。



- A-A' 掘土層説明**
1. 赤褐色土 1-2mm 大のローム粒を散見含む。軟性弱く、締まりやや弱い。
 2. 暗褐色土 1-2mm 大のローム粒を散見含む。粘性弱く、締まりやや弱い。
 3. 暗褐色土 系褐色土を基底状に含む。1-2mm 大のローム粒を散見含む。粘性弱く、締まりやや弱い。
 4. 茶褐色土 暗褐色土を基底状に含む。1-2mm 大のローム粒を散見含む。粘性弱く、締まりやや弱い。
 5. 暗褐色土 系褐色土を基底状に含む。1-2mm 大のローム粒を散見含む。粘性弱く、締まりやや弱い。
 6. 暗褐色土 1-2mm 大のローム粒を散見含む。粘性弱く、締まりやや弱い。
 7. 系褐色土 暗褐色土を基底状に含む。1-2mm 大のローム粒を散見含む。粘性弱く、締まりやや弱い。

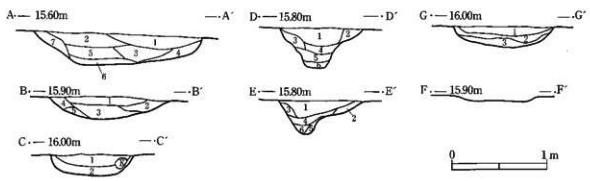
- B-B' 掘土層説明**
1. 暗褐色土 系褐色土を基底状に含む。1-2mm 大のローム粒を散見含む。粘性弱く、締まりやや弱い。
 2. 暗褐色土 系褐色土を基底状に含む。1-2mm 大のローム粒を散見含む。粘性弱く、締まりやや弱い。
 3. 系褐色土 系褐色土を基底状に含む。1-2mm 大のローム粒を散見含む。粘性弱く、締まりやや弱い。
 4. 暗褐色土 系褐色土を基底状に含む。1-2mm 大のローム粒を散見含む。粘性弱く、締まりやや弱い。
 5. 暗褐色土 系褐色土を基底状に含む。粘性弱く、締まりやや弱い。

- C-C' 掘土層説明**
1. 暗褐色土 1-2mm 大のローム粒を多量に含む。粘性弱く、締まりやや弱い。
 2. 暗褐色土 暗褐色土を基底状に含む。1-2mm 大のローム粒を散見含む。粘性やや弱く、締まりやや弱い。

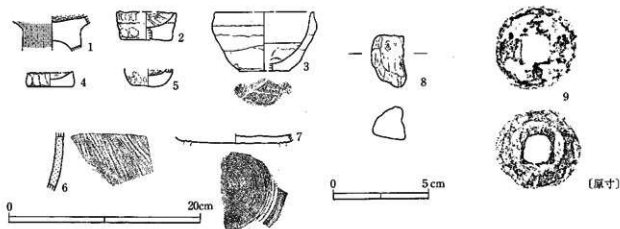
- D-D' 掘土層説明**
1. 暗褐色土 系褐色土を基底状に含む。1-2mm 大のローム粒を少量含む。粘性弱く、締まり中。
 2. 系褐色土 系褐色土を基底状に少量含む。1-2mm 大のローム粒を少量含む。粘性弱く、締まりやや弱い。
 3. 系褐色土 暗褐色土を基底状に含む。1-2mm 大のローム粒を散見含む。粘性弱く、締まり中。
 4. 暗褐色土 系褐色土を基底状に含む。1-2mm 大のローム粒を少量含む。粘性弱く、締まり中。
 5. 系褐色土 系褐色土を基底状に少量含む。1-2mm 大のローム粒を少量含む。粘性弱く、締まりやや弱い。
 6. 暗褐色土 系褐色土を基底状に多く含む。1-2mm 大のローム粒を少量含む。粘性弱く、締まりやや弱い。

- E-E' 掘土層説明**
1. 暗褐色土 系褐色土を基底状に含む。1-2mm 大のローム粒を少量含む。粘性弱く、締まり中。
 2. 系褐色土 粘性弱く、締まりやや弱い。
 3. 系褐色土 ロームブロック散見。粘性弱く、締まり中。
 4. 暗褐色土 系褐色土を基底状に多く含む。1-2mm 大のローム粒を少量含む。粘性弱く、締まり中。
 5. 暗褐色土 ローム上に暗褐色土を少量含む。粘性弱く、締まり中。
 6. 暗褐色土 1-2mm 大のローム粒を多く含む。粘性弱く、締まり中。

- G-G' 掘土層説明**
1. 系褐色土 系褐色土。ローム散見。粘性弱く、締まり中。
 2. 暗褐色土 暗褐色土。ローム散見。1層よりローム多い。
 3. 暗褐色土 ローム上に、2層が散見する。



第35図 溝状遺構実測図



第36図 溝内出土遺物

規模は幅0.88m、深さ0.35～0.45mを測る。断面は東と北側立ち上がりで中場をもつ。覆土は暗褐色土～褐色土の自然埋没層である。

05Mは、調査区南側のBⅣ-13.14 グリッドに位置する。04Mを切る。規模は幅0.85m、深さ7～8cmを測る。

06Mは、調査区を南北方向に縦走る溝で、08H、22D、01Mを切っている。南側で西方向に緩いカーブを描き調査範囲外になっている。規模は幅1.5m、深さ0.32mを測る。覆土は暗褐色土～褐色土で、何回かの覆土の溝さらいを経ているようである。

第23表 溝内遺物観察表

発掘番号	器種	寸法 (cm)	遺存度	色調	胎土	手法上の特徴
36-4 1	土師器 点坏	遺存高 3.8	胴部全周	外赤褐色 内漆黒色	白色粒、雲母	坏部内へラ磨き後灰土吸着による黒色処理 胴部外へ縦位へラ削り後などで整形 外周赤色塗彩 04M出土
2	土師器 手づくね	口径 6.0 器高 2.9	全体2/5 底径 5.4	外赤赤褐色 内黒褐色	白色・赤色粒 石英	外へ拵などで、内へなどで 02M出土
3	土師器 手づくね	口径 10.4 器高 6.2	全体1/4 底径 5.3	赤茶褐色	白色粒、雲母	輪轆み成形 口辺部外周と内面中位へ拵などで 外周内へ拵などで整形 底部木炭灰 02M出土
4	土師器 手づくね	口径 4.8 器高 1.5	全体1/2 底径 4.7	淡基褐色	白色粒	内外などで整形 06M出土
5	土師器 手づくね	遺存高 1.9	底部1/2	外赤赤褐色 内淡茶褐色	白色粒、雲母	外へ拵などで、内へ拵などで 06M出土
6	灰土器 甕	遺存高 -	胴部の一部	淡青灰色	長石多含	胴部外へ縦位平行叩き目文 01M出土
7	土師器 坏	底径 9.2 遺存高 1.0	底部1/2	淡橙褐色	白色粒、砂粒	ロクロ使用高台付坏 高台部欠損 01M出土
8	軽石	縦長2.8 横長1.7 重さ2.6g		上面と側面に縦位の線痕が見られる。04M出土		
9	銭貨	直径2.1 内径0.8 重さ2.6g	完形	元龜通寶 (北宋)	行書体	06M出土

第3章 ま と め

第1節 縄文時代

今回の調査において陥穴1基、炉穴1基を検出した。a地点においても同遺構、同基の成果をあげている。陥穴は2基とも形態において相違が見られるが、占地、主軸方位においては似た傾向を示している。今回調査の202Pは3.22m×1.49mで、深さ1.55mを測る。主軸方位はN-29°-Wで、確認面での標高は15.7mである。前回調査の26Pは1.38m×0.87mで、深さ0.78mを測る。主軸方位はN-30°-Wで、確認面での標高は15.9mである。時期については不明であるが、北側に広がる高津川の水場に至るケモノ道ないしは追い込み罌の一地点に設置されたと考えられる。炉穴については形態、占地とも類似性がなく、住居の炉としての可能性もあり判断はむずかしい。遺物では前回調査と同様に中期前半阿玉台Ⅰ、Ⅱ式及び阿玉台式併行の勝坂式系土器の他に早期条痕文系土器が出土している。点数は小片を含めても20点程度で本遺跡においては非常に客体的である。

第2節 古墳時代

本遺跡の主体となる時期で、中期の堅穴住居跡1軒がa地点において客体的に検出された他は、全て後期である。今回の調査において堅穴住居跡6軒、床硬化面1箇所、掘立柱建物跡1棟を検出した。a地点では堅穴住居跡13軒、掘立柱建物跡5棟、土坑8基を検出している。a、b両地点を通じた遺構の時期は、6世紀後半・末葉～7世紀前半以降でおおむね50～70年間の存続期間が想定できる。遺構変遷及び遺物については節を改める。

第3節 平安時代

a地点では堅穴住居跡5軒、掘立柱建物跡2棟を検出している。報告時において溝状遺構1条を当期に想定したが、今回の調査において近世以降の遺構と判明したのでここに訂正する。今回の調査では堅穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟を検出した。a、b両地点を通じた遺構の時期は、9世紀第2四半期を中心とした前後の9世紀前半～半ばに想定される。遺構変遷及び遺物については別記する。

第4節 中・近世以降

中世については遺構は検出されなかった。遺物は、元盛通寶が1点06M溝内から出土した。近接地の遺跡としては、直線距離にして西600mの位置に高津館跡が所在する。土壘や堀が遺存するが、構造・規模・築造時期等は不明である。また、西隣接地の高津新山遺跡では地下式坑敷基が検出され、中世陶器片等が出土している。

近世以降では、溝状遺構が5条検出された。重複関係から04Mが一番古く、続いて01M・05M、最後に06Mとなる。この内02,04,05,06 Mは同一方向であり、公園上にも南側に細長く分筆されている部分がある。明治15年の陸軍迅速園では内込遺跡一帯は畑地であり、畑の区画上施設と考えている。

第5節 内込遺跡 a、b 地点における遺構の変遷について (第37図)

a地点については既に報告書刊行済であるが、今回調査の08D,09Dがa地点調査分と合体して一遺構になる点、a地点の成果を援用しつつ内込遺跡の土地利用としての遺構の変遷過程を明らかにしていく方がより多くの情報量が得られることから、遺構についてのみ紙面をさくこととした。

遺跡は古墳時代中期～平安時代前半の6期に分けられる。2,3期及び5,6期は、時間幅としては遺物観

察上の前後関係である。縄文時代以外の本遺跡の開始時期は、遺跡全体の最終的判断ではないが a、b 地点及び緩い谷津を隔てた西隣接地の高津新山遺跡を参考してみると、古墳時代前期をさかのぼる可能性は少ない。高津新山遺跡では、古墳時代前期末葉に数軒の竪穴住居跡、後期後半(7世紀中ば～後半)に数軒規模の竪穴住居跡群そして奈良・平安時代に竪穴住居跡109軒、掘立柱建物跡21棟を検出し、奈良・平安時代に花開いた遺跡と言える。反対に内込遺跡では、古墳時代後期(6世紀後半・末葉～7世紀前半以降)に主体をおき、平安時代にやや散漫となる傾向である。

1期

内込遺跡の開始としては、小竪穴遺構1基の検出である。時期は古墳時代中期(5世紀代)に想定される。遺構は一時的な使用と見られ、少量の焼土と遺物を1点検出したのみである。

2期

竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡4(5)棟で構成され、何らかの意図により遺構数が増加し、内込遺跡の主体となる時期である。遺跡内は南～北に向けて低くなる地形で、南側で標高16.3m、北側で14.9mと1.4mの比高差を持っている。遺構は全体に分布するが、中央～北側の一群と南側の一群に大別される。各々竪穴住居と掘立柱建物により構成される。時期は6世紀後半・末葉～7世紀初頭に想定される。

3期

竪穴住居跡5軒で構成される。占地は2期と同様である。前述したように23期は若干の時間差を遺物から伺える程度であり、2期と包括した中で考えるべきものであろう。時期は6世紀末葉～7世紀前半に想定される。

4期

竪穴住居跡4軒、土坑7基で構成される。占地は北側の低い部分を選び、標高15.6m～16.3mの南北方向の中央やや北から南側に位置する。遺構数の減少が著しく、主体となる一群が移動したと考えられる。この期をもってしばらく、内込遺跡から人足は途絶える。時期は7世紀前半以降に想定される。

5.6期

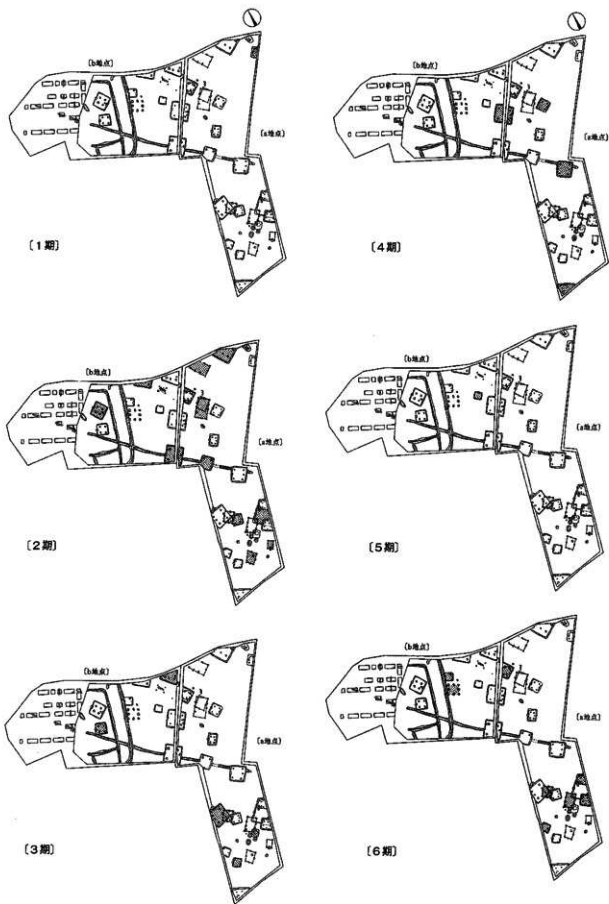
5期は竪穴住居跡2軒で構成される。前述したように、6期との明確な時間差は遺物から若干の前後を伺える程度で5.6期を包括的に扱っていくこととした。6期は竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡3棟で構成される。占地としては4期以降を踏襲した形で、北側の低い部分は避けて遺構が造られる。遺構は北側と南側の一群に大別される。ただ、両者間に「井」を共通認識とした黒書土器で「吉井」、「子野井」、「井」が出土している。高津新山遺跡でも「井」の黒書土器が出土していることから、高津新山ムラからの分派と考えるのが妥当であろう。

第6節 内込遺跡b地点における2期から6期の遺物について

内込遺跡b地点では遺物観察から6世紀後半・末葉～7世紀前半以降と9世紀前半～中葉にかけての土師器、須恵器、土製品、石製品、鉄器等が出土している。以下a地点検出の1期(5世紀代)を除いた2期～6期について外観してみた。

2期(第38図)

24Dを標準とした。陶器編年TK43型式で6世紀後半～末葉に位置づけられる。土師器のみで構成され、坏、高坏、小型鉢、鉢、小型甕、甕、甗、支脚が出土した。坏類は坏蓋模倣形態が主体的で、口径13～14cmとやや大振りである。黒色処理は漆仕上げ、炭素吸着の二者が見られる。本跡遺物はほぼ同伴遺物であり、坏についてもバラエティーに富んでいる。この中で、2.34はほぼ同一人ないし集団による規格品と見られる。直立した口辺部で、口縁端部は内削ぎで沈線状の凹みが巡っている。同様の口縁



第37图 内込遗址 a.b 地点遗构实景图 (S = 1:1,500)

端部処理は2021.22においても見られる。この3点は口辺部に2～3の段を持ち、炭素吸着による黒色処理を施す有段口縁環である。この二者の口縁端部処理は、中村編年Ⅰ型式諸段階に見られる蓋坯の蓋に類似性が見られる。有段口縁環については、体部のへら削り調整を除いて須恵器の忠実な模倣と言えないだろうか。なお、この3点の有段口縁環は、田中広明氏の分類に従えば2021がBⅠ系列、22がA系列だがやや趣を異にしている。時期としては、有段口縁環Ⅱ期の範疇と思われる。甕についてはやや胴の張る球形で、口辺部がくの字状を呈する在地甕と小型甕がセットとなっている。甕は頸部がくの字状で胴上半部にやや丸みを持つ単孔式形態である。

09Dは6世紀末葉以降に位置づけられる。坏は坏身形態の12で口径11～13cm、矮小化した3が混入している。甕は在地甕でも球形で大型タイプのもとと小型甕が出土している。

20Dでは矮小化した坏が主体でやや後出の段階である。混入遺物ではあるが、6の有段口縁環が出土している。

25Dは硬化面のみで規模等は不明であるが、a地点02Dに類似した形態と想定される。遺物は坏、高坏が出土した。1は有段口縁環で、口径18.3cmと大振りではAⅣ系列に属し、時期は有段口縁環Ⅱ期の範疇と思われる。高坏は坏部～脚部外面に赤彩され、坏部内面に炭素吸着による黒色処理を施す。

3期 (第39図)

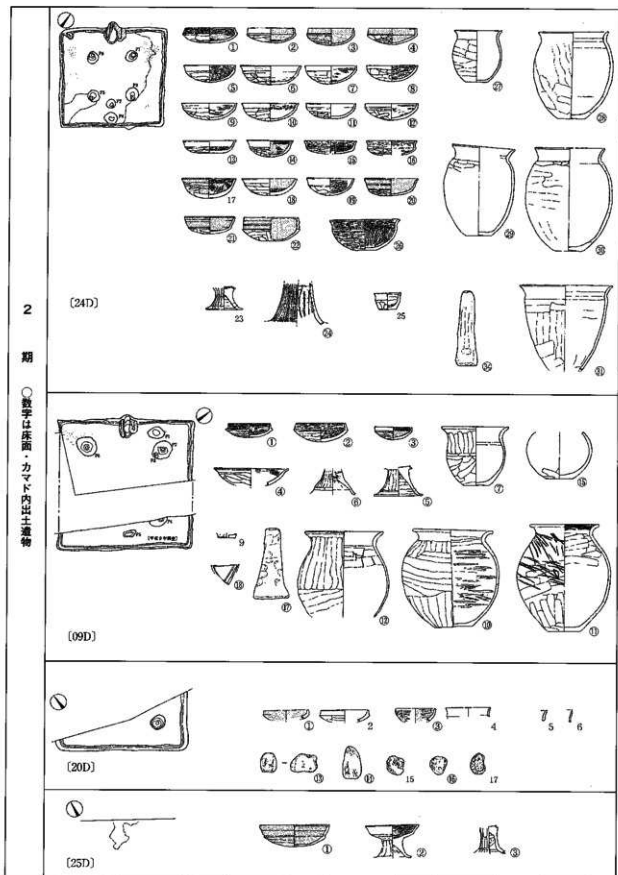
内込遺跡では、この段階から須恵器が食膳具として供給されるようになる。23DⅠは関東産蓋坯、19DⅠは判断が付きにくい、10は武蔵産の甕である。本期の時期は陶邑編年TK209型式併行期～TK217型式で6世紀末葉～7世紀前半に位置づけられる。土師器坏は出土遺物が少ないが、坏蓋模倣形態が主体的である。

19DはTK209型式併行期で6世紀末葉～7世紀初頭に位置づけられる。土師器では坏、高坏、小型甕、甕で、須恵器では蓋坯、甕が出土している。土師器では、坏は坏蓋形態のみで、口径11～13cm、17cmとばらつきがあり、黒色処理の有無が見られる。高坏は脚部において柱状と脚部上半から広がる2タイプが見られる。甕類は、12の小型で口辺部がくの字状を呈するタイプと11の球形の胴部をもつ2種の在地甕及び本遺跡では、各期において客体的な常態型甕の3種が見られる。須恵器坏身は受部径11.4cm、口径14cmで全体にシャープさが見られる。堅牢な焼き上がりである。

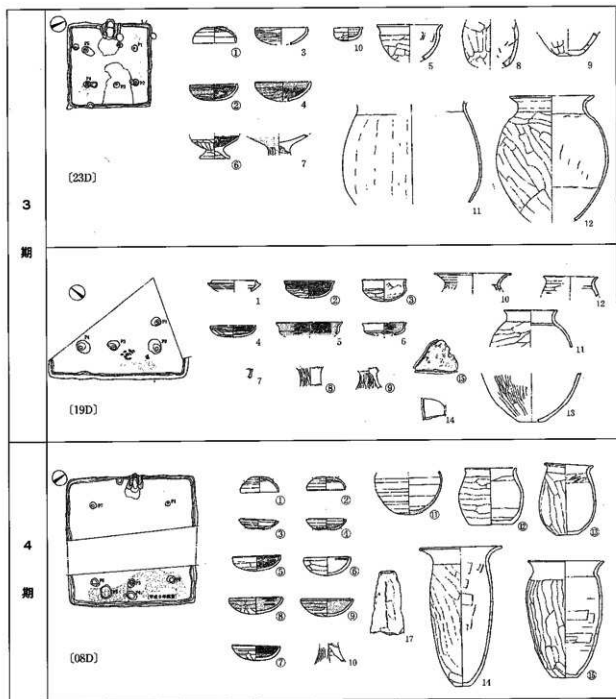
23DはTK209型式併行期～TK217型式で6世紀末葉～7世紀前半に位置づけられる。土師器では、坏、高坏、手づくね、鉢、小型甕、甕で、須恵器では蓋坯が出土している。坏は坏蓋形態のみで、口径13～15cm、黒色処理の有無が見られる。甕類は、8.9の小型で明確な底部を意識せず厚手のタイプと11.12の球形だがやや長胴化し、大型化した在地甕の2種である。須恵器坏蓋は口径11.3cm、器高4.3cmでやや扁平、ロクロ目や回転へら削り調整はシャープさに欠けている。焼成は堅牢で締まっている。

4期 (第39図)

08Dを標準とした。本期の時期は陶邑編年TK217型式以降で7世紀前半以降に位置づけられる。^{註1)}土師器、須恵器により構成される。土師器では坏、小型甕、甕で、須恵器では蓋坯、短頸甕が出土している。本跡遺物はほぼ共存遺物であり、14についてもほぼ廃絶時の遺物としてよい。土師器坏は須恵器蓋坯模倣形態のものは全くなく、碗形態のみである。口径は12～14cmで、器高は4～5cmを測る。漆仕上げと炭素吸着による黒色処理を施す5.7.8.9と未処理の6が混在する。また8.9はほぼ炭格品で、体部外面のへら削り調整についても、一地点で同一方向に底面を数回削った後に横方向のへら削りを行うという製作上の取決めがなされているようである。甕は、口辺部がくの字状を呈する在地甕の13.15と14の長胴甕の3種が見られる。在地甕2種は長胴化が著しく進んでいる。須恵器では蓋坯が坏身、坏蓋のセットとして出土した。坏身は口径10.5cm、受部径9.3cm程度で器高は2.6～3.1cmを測る。坏蓋は口径



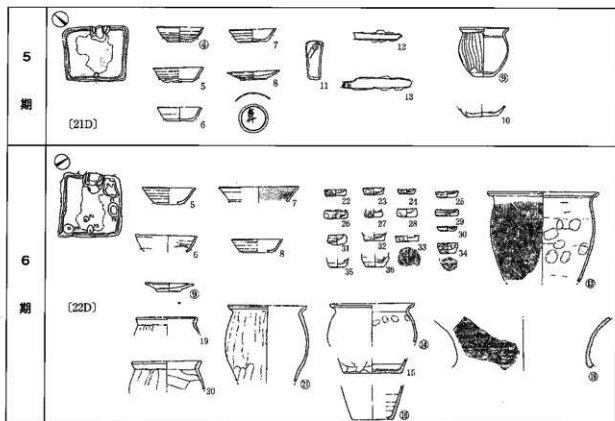
第38図 内込遺跡 b 地点2期遺物集成図 (S=1/200, 1/10〔土器・支脚〕, 1/5〔石・土・鉄製品〕)



第39図 内込遺跡b地点3.4期遺物集成図 (S=1/200,1/10,1/5)

99cm. 器高3.6～4.2cmを測る。坏身の受部径と坏蓋の口径から妥当なセットと言える。11の短頸壺は口辺部～胴上半部を欠失しているため全形が判らないが、底部は回転へら削り調整により丸底となっている。上半部欠失後に坏類の収納用として再利用されている。これら須恵器類は東海産である。

08Dの遺物出土状況(9ページ右側)の中で、P7前の壁寄りの位置に食器類が整理された状態で出土した。二次的使用の短頸壺11中に土師器坏6.9.5と須恵器蓋坏1が、大振りの土師器坏7中に須恵器蓋坏4.3.2が、その回りに土師器坏8、倒位の土師器甕15、おそらく正位の土師器甕13、少し離れて正位の土師器甕12が検出された。収納として観た場合、柱の後ろ側を食器具の整理スペースとして使用していたことがいえよう。同様の空間利用は24Dにおいても見られる(25ページ右側)。こちらはカマド袖両サイド



第40図 内込遺跡 b 地点5.6期遺物集成図 (S = 1/200, 1/10, 1/5)

からで、左袖脇では、正位の版内に坏7点が収納され、支脚が立て掛けられていた。右袖脇では、正位の堯2点とその間に支脚が立て掛けられていた状況である。

5期 (第40図)

b 地点においては、堅穴住居跡1軒のみの検出である。住居廃絶時の遺物は4と9で、他は混入遺物である。本住居跡は人為的埋め戻しをしており、混入した遺物が住居廃絶時に近い遺物とする5.6.7の坏の形態、8の土師器皿の出現時期を参考に、9世紀第2四半期やや前とすることが妥当であろう。

6期 (第40図)

b 地点においては、堅穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟の検出である。住居廃絶時の遺物は9.13.14.16.18.21でその他は自然埋没による混入遺物である。カマド出土の9の土師器皿、5~8の土師器坏類の形態を参考にすると9世紀第2四半期に、また16.18を除く須恵器甕類の形態や整形技法として平行叩き目文、手によるヘラ削り、体部内面の当て具痕等を考慮すると9世紀第2四半期~第3四半期に想定されよう。19.20の土師器小型堯もやや後出の形態を持つ。よって、本期は9世紀第2四半期を中心とした時期と想定できる。比較的まとまった手づくね土器の扱いは、住居覆土中に散漫に出ているが何らかの意図により投棄したと考えたい。

以上、雑駁な形ではあるが、内込遺跡の遺構、遺物についてまとめてみた。古墳時代の遺物については、(財)千葉県文化財センターの田中 裕氏に実見いただいた。氏は現場中にも拘わらず、快く引き受けていただき、記して感謝の意を表したい。また、筆者の力量不足から理解の至らない部分、誤認等の部分があると思われるが、全て筆者の責によるものであることをお断りしておく。

注

(1) 筆者の中では、東海産須恵器産年の年代観、輪形型の土師器杯の主体量としての位置づけやa地点の同時期住居群の遺物構成の中に須恵器蓋、杯等の新しい段階の遺物が一切見られないことから7世紀中葉を想定している。しかし、東海地方湖西側跡群などでは合子状の蓋杯形態とつまみ付き杯蓋、杯身形態の両者が何時期に生産されており、時期の特定はむずかしい状況である。

引用・参考文献

第3章第4節

朝比奈竹男他1982「千葉県八千代市高津新山遺跡」八千代市教育委員会

1983「千葉県八千代市高津新山遺跡Ⅱ」八千代市教育委員会

1984「千葉県八千代市高津新山遺跡Ⅲ」八千代市教育委員会

高津新山遺跡調査会1990「高津新山遺跡出土品展示会資料」

八千代市史編さん委員会編1991「八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世」

武蔵健一他2004「千葉県八千代市高津新山跡b地点・本郷台遺跡発掘調査報告書」八千代市教育委員会

全般

菱田哲郎1996「須恵器の系譜」歴史発掘10 講談社

森竜哉他2001「千葉県八千代市内込遺跡発掘調査報告書」八千代市遺跡調査会

古墳時代

中村清1981「和泉陶器の研究」柏書房

萩原恭一他1988「東金市久我台遺跡」財団法人千葉県文化財センター

長谷川厚1989「神奈川・千葉県地域の赤彩土器・黒色処理土器について」『東国土器研究』第2号 東国土器研究会

田中広明1991「古墳時代後期の土師器生産と集落への供給——有段口縁杯の展開と在地社会の動態——」『埼玉考古学論集』財団法人埼玉県歴史文化財調査事業団

後藤健一1991「3 須恵器の編年 東海-B 静岡」『古墳時代の研究』第6巻 土師器と須恵器 雄山閣出版

長谷川厚1995「東国における7世紀史の意義——土師器の動向からみた東国社会の変革について」『王朝の考古学』大川清博士古

稀記念会編 雄山閣出版

小沢洋1995「房総の古墳後期土器——杯の変遷を中心として——」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会

田中広明1995「関東西部における律令制成立までの土器様相と歴史的動向——群馬・埼玉県を中心にして——」『東国土器研究』

第4号 東国土器研究会

岡田光広他1996「主要地方遺跡戸野州線理蔵文化財調査報告書」千葉県文化財センター調査報告第276集 財団法人千葉県文化財

センター

鶴岡正昭1997「関東の7世紀の土器」『古代の土器研究——律令的土器様式の西・東5 7世紀の土器——』古代の土器研究会

渡辺 1999「東日本の飛鳥・白鳳時代の土器について——北武蔵を事例に——」『飛鳥・白鳳の瓦と土器——年代論——』帝塚山

大学考古学研究所歴史考古学研究会 古代の土器研究会

鶴岡正昭2001「関東における律令体制成立期の土師器供器具」『東京考古』19東京考古談話会

平安時代

菅牛隆1990「房総における黒色土器の展開と終焉」『東国土器研究』第3号 東国土器研究会

藤岡孝司1990「八千代市霞田地区遺跡群の歴史時代土器」『研究連絡誌』第30号 財団法人千葉県文化財センター

嶋田浩司他1999「千葉北部地区新市街地造成整備事業関連理蔵文化財調査報告書——印西市鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡——」『県

県文化財センター調査報告第358集 財団法人千葉県文化財センター

写 真 图 版



遺跡全景（西から）手前は24D 左奥19D



遺跡全景 手前24D, 23D 中央奥09D



遺跡全景



遺跡全景



08D 完掘状況 (奥は 21D)



壁際遺物出土状況



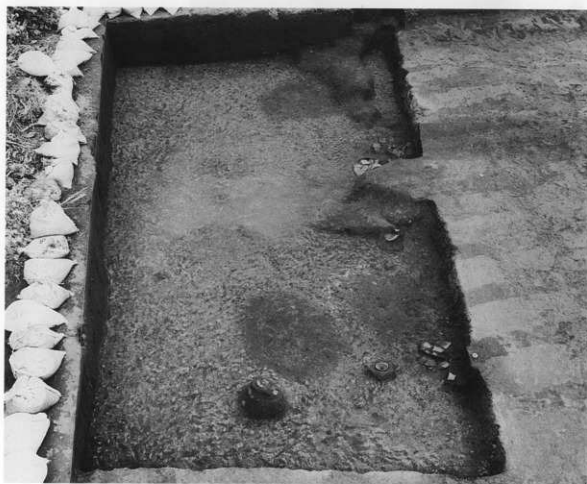
カマドの天井部、煙通部がよく遺存している。



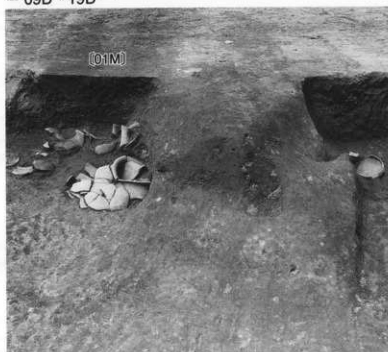
拡大部



09D 完掘状況



遺物出土状況



09D カマド脇遺物出土状況



09D カマド



19D 完掘状況



19D 遺物出土状況

19D NO.2 出土状況

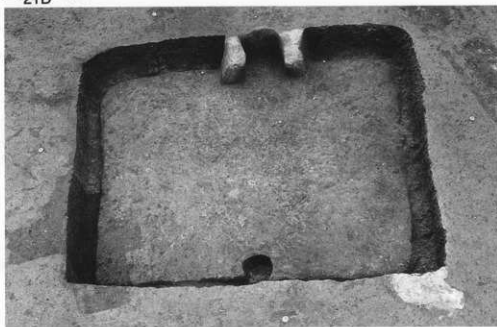


19D NO.3 出土状況



20D 完掘状況





21D 完掘状況



21D カマド



カマド内 No.9 遺存状況



No.4 出土状況



22D 完掘状況
(カマド奥は 06M)



22D カマド



遺物出土状況



23D 完掘状況



23D カマド



23D 遺物出土状況



24D 完掘状況



カマド左袖脇遺物出土状況



No.31 内環類出土状況



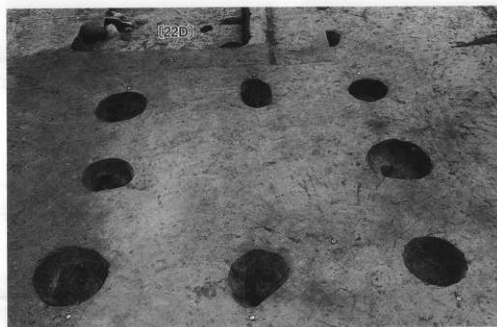
24D カマド



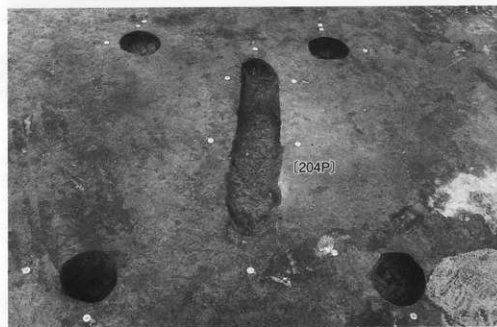
カマド右袖脇 No.28, 29 出土状況



25D 床硬化面（中央右側）
及び遺物出土状況



08H 完掘状況
（奥は 22D）



09H 完掘状況
（中央は 204P）



202P 完掘状況



203P 完掘状況

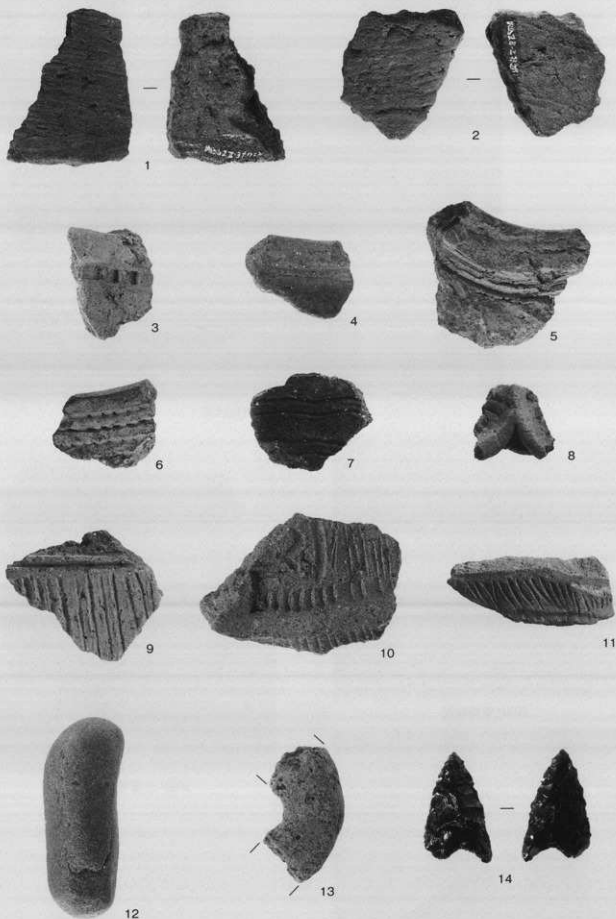


202P 土層堆積状況



205P 完掘状況

図版12
—縄文時代の遺物—





1



2



3



5



4



6



7



9



8



12



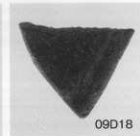
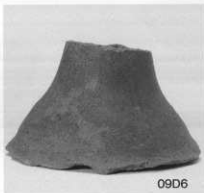
14

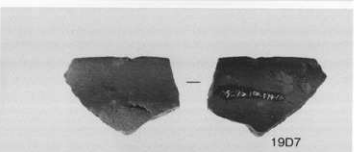
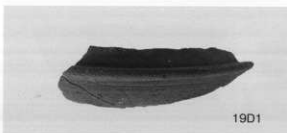


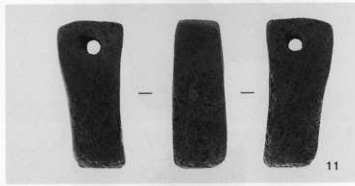
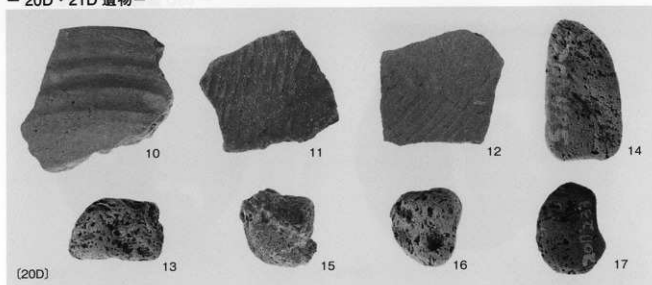
15

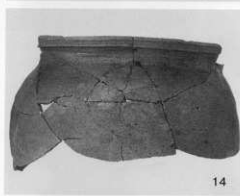


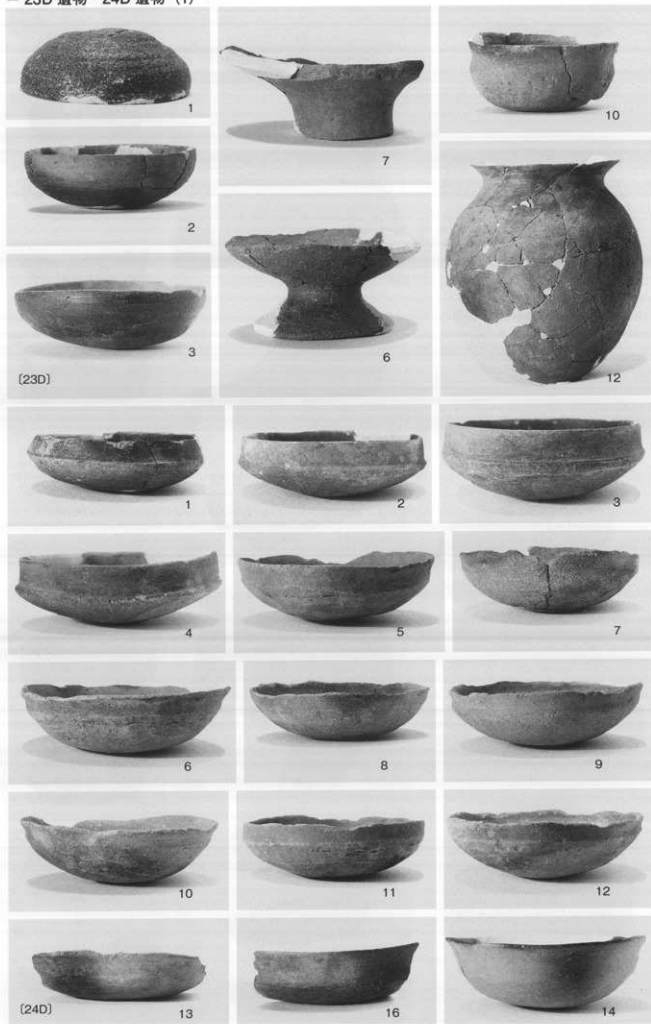
13

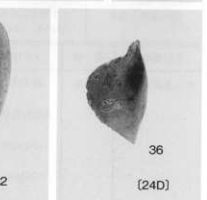
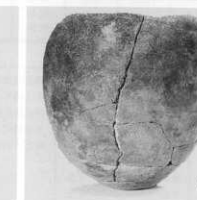


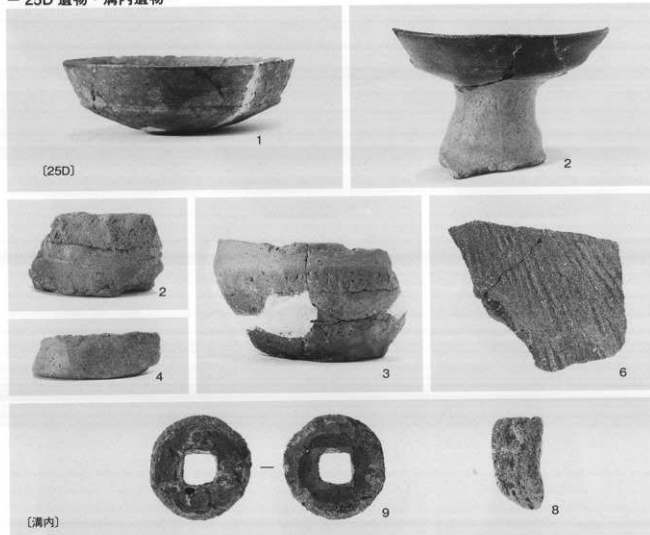












報告書抄録

ふりがな	ちばげんやちよし うちごめいせきびーちてんはっくつちようさほうこくしょ — たちぞうせいにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちようさ —							
書名	千葉県八千代市 内込遺跡b地点発掘調査報告書 — 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査 —							
編者名	森 竜哉							
編集機関	八千代市遺跡調査会							
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 TEL.047 (483) 1151							
発行年月日	西暦 2003年(平成15年)12月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うちごめいせきびーちてん 内込遺跡b地点	ちばよしちちよひかいた (あざちちごめ) 八千代市八千代台北 (字内込) 17-14	12221	246	35度 42分 40秒	140度 05分 25秒	20020201 — 20020509	上層1,500m ²	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
内込遺跡b地点	集落跡	縄文時代	陥穴 如	1基 1基	縄文時代早期後半・中期前 半土器片、石鏃等 古墳			
		古墳時代後期	竪穴住居跡 掘立柱建物跡	7軒 1棟	時代後期須恵器・土師器 平安時代土師器・須恵器、			
		平安時代	竪穴住居跡	2軒	砥石、刀子等			
		中近世	掘立柱建物跡 溝状遺構 土坑	1棟 5条 2基				

千葉県八千代市
内込遺跡 b 地点発掘調査報告書
- 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査 -
2003

印刷日 2003年12月15日
発行日 2003年12月22日
発行 岩井 富久
編集 八千代市遺跡調査会
